

中・四国

# アメリカ文学研究

Chu-Shikoku Studies in American Literature

June, 2017



No. 53





# 中・四国 アメリカ文学研究

*Chu-Shikoku*

*Studies in American Literature*

No.53

June 2017

中・四国アメリカ文学会

The Chu-Shikoku American Literature Society



## 目 次

### 論文

共感するマシーセン

—— 感傷小説研究における『アメリカン・ルネサンス』批判再考 ——

..... 大 野 瀬津子 1

### シンポジウム報告

中・四国アメリカ文学会第45回大会シンポジウム アメリカ文学の独立

..... 松 島 欣 哉、本 岡 亜沙子 12  
山 内 玲、山 口 善 成

### 書評

大宮健史 著

*Mark Twain and Europe*

重い中身の瀟洒な本

..... 市 川 博 彬 32

渡邊克昭 著

『楽園に死す—アメリカ的想像力と<死>のアポリア』

..... 森 瑞 樹 34

上岡克己 編著

『世界を変えた森の思想家 一心にひびくソローの名言と生き方』

..... 松 島 欣 哉 37

竹内勝徳・高橋勤 編

『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』

..... 栗 原 武 士 40

成田雅彦・西谷拓哉・高尾直知 編著

『ホーソーンの文学的遺産—ロマンスと歴史の変貌』

..... 高 橋 愛 42

藤江啓子 著

『資本主義から環境主義へ—アメリカ文学を中心として』

..... 藤 本 幸 伸 45

広瀬佳司・佐川和茂・伊達雅彦 編著

『ホロコーストとユーモア精神』

..... 三重野 佳 子 48

# CONTENTS

## Article

Sympathetic Matthiessen:

- Rethinking the Criticism of *American Renaissance* in the Studies of Sentimental Novels  
..... OHNO Setsuko 1

## Report of Symposium at the 45th Conference

Independence of American Literature

- ..... MATSUSHIMA Kinya, MOTOOKA Asako 12  
YAMAUCHI Ryo, YAMAGUCHI Yoshinari

## Book Reviews

- ..... ICHIKAWA Hiroyoshi, MORI Mizuki 32  
..... MATSUSHIMA Kinya, KURIHARA Takeshi  
..... TAKAHASHI Ai, FUJIMOTO Yukinobu  
..... MIENO Yoshiko

## 共感するマシーセン

—— 感傷小説研究における『アメリカン・ルネサンス』批判再考 ——

大野 瀬津子

## 序

「感傷小説」(sentimental novel) と呼ばれる作品群の研究を開拓したのは、フェミニスト批評家たちだった。<sup>1</sup> 1970年代から1980年代当時のフェミニスト批評家の多くが、男性作家にしか注目しない男性批評家に異議を申し立てた。集中砲火を浴びたのが、『アメリカン・ルネサンス——エマソンとホイットマンの時代の芸術と表現』(*American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*) で知られるF・O・マシーセン (F. O. Matthiessen) である(舌津, 「アメリカ文学史の見直し論争」118)。<sup>2</sup> フェミニスト批評家たちの攻撃の矛先は、自著で扱う5人の作家の共通項としてマシーセンが挙げた「民主主義の可能性への貢献」(devotion to the possibility of democracy, Matthiessen ix) に向けられた。ニーナ・ベイム (Nina Baym) は、彼の民主主義が女性不在の文学史の形成に加担したと示唆する(“Melodramas” 123, 126)。ジェイン・トンプキンス (Jane Tompkins) は、彼の民主主義に女性や他のマイノリティが含まれていない点を指弾し、自著『扇情的な意匠——アメリカ小説の文化的仕事 1790-1860』(*Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860*, 1985) をマシーセンの『アメリカン・ルネサンス』に「対抗する試み」と明言する (Tompkins 199-200)。<sup>3</sup> 両フェミニスト批評家ともに、女性作家の作品を一つの文学ジャンルとして再評価することを目指した。<sup>4</sup> その際彼女たちがテキストに見いだしたのは、共感という価値だった。感傷小説研究は、マシーセンの民主主義に女性排除の傾向を看取したフェミニスト批評家が、共感という価値を掲げて女性作家を再評価することから始まったといえる。

論集『センチメンタルな男たち——アメリカ文化における男らしさと情動の政治学』(*Sentimental Men: Masculinity and the Politics of Affect in American Culture*, 1999) は、感傷小説研究の新しい流れを作った。同書の序文でメアリー・チャップマン (Mary Chapman) とグレン・ヘンドラー (Glenn Hendler) は、共感 (sympathy) など感情に関わるものを女性の領域へと閉じ込めてきた従来のフェミニスト批評に疑問を呈し、センチメンタルな男たちがアメリカ文化の形成に担った役割の重要性を訴えた (4, 8)。同書の出版以降、男性作家の作品を共感と結びつけて再考する試みが活発化している。<sup>5</sup> しかし男性批評家マシーセンの位置づけは変わらない。『センチメンタルな男たち』の序文でもなお、マシーセンは「男性中心のキャンオンを拡大」した張本人とされている (4)。<sup>6</sup>

マシーセンの民主主義は、女性や弱者を締め出すものではない。本稿では、マシーセンが弱い立場の人間への共感を文学基準に含めていた点を確認し、彼が共感重視の姿勢を感傷小説研究と共有していたことを明らかにする。この考察を通じ、感傷小説研究の敵という旧来のマシーセン

像を修正したい。

## I. フェミニスト批評家と共感

感傷小説研究の分野では、フェミニスト批評家のトンプキンスやベイムが、共感という視点から女性作家の読み直しを始めたとされている。<sup>7</sup> 本節では、両批評家が感傷小説に認めた共感という価値の共通項を導き出す。

トンプキンスは、インテリ好みの難解な言語表現にしか文学的価値を認めてこなかったとして従来の文学研究を批判し、庶民にも分かる平易な言葉で書かれた感傷小説の再評価を目指す(125)。現実社会の変革を志した点にこそ感傷小説の意義がある、と訴えるこの批評家は、それらが社会を動かす前段階として、大衆の感情を動かしたことを強調する。<sup>8</sup> トンプキンスはエリート層の知性ではなく、一般大衆の情に訴える力を感傷小説に認めるのだ。

他方、男性批評家が女性を神話化してきたと主張するベイム<sup>9</sup>は、現実の女性の経験を回復させる場として女性小説の研究という新境地を開いた (Baym, "Melodramas" 136; Baym, *Woman's Fiction* 11)。その際ベイムは、女性読者の存在を前景化する (*Women's Fiction* 12)。女性作家の責務の一つは、ヒロインの「試練と克服」の物語を通じ、女性読者が現実世界の試練に立ち向かえるよう彼女たちの心に変化を促す点にあった (*Women's Fiction* 17, 19)。ここで共感は主要な役割を果たす。物語が「読者をヒロインと同一化させ、彼女たちの感情を引き付け誘導する」のだ (*Woman's Fiction* 17)。トンプキンス同様、ベイムも読者の感情を操作する力を女性の小説に認めるのだが、その際「同一化」(identification) が起こっているとする点は興味深い (*Women's Fiction* 17, 34)。読者はヒロインが経験するジレンマを「自らのものとして」捉え、怒りや欲求不満、喜びをヒロインとともにする (17)。読者がヒロインになりきる心理作用にベイムは着目している。

このようにトンプキンスとベイムは、同時代の庶民や女性の感情に働きかけて作品内容やヒロインに共鳴させる魅力を、女性作家の評価の基軸とするのである。

## II. マシーセンの共感と民主主義

マシーセンの『アメリカン・ルネサンス』は、発表後しばらくは、優れたアメリカ文学史として賞賛されるとともに、マシーセンの批評的もしくは政治的スタンスと絡めて肯定的に評価されることが多かった。しかし1970年代から1980年代にかけて、マシーセンをエリート男性の代表もしくはナショナリストと捉え、その民主主義の排他性を批判する動きが目立ってくる。<sup>10</sup> 女性を排除した黒幕として非難する感傷小説研究者たちのマシーセン評価は、この流れを汲む。生涯をともした年上男性との書簡集が発表されて以降、主としてゲイ・スタディーズの文脈からマシーセンを再評価する機運が高まりを見せている。しかしこの分野の批評家たちは、書簡に表れたマシーセンの私人としての顔をセクシュアリティの領域に限定し、彼のセクシュアリティが『アメリカン・ルネサンス』のなかに反映されているか否かに関心を集中させてきた。<sup>11</sup>

こうした批評動向のなか、マシーセンの民主主義の根底にホイットマンが描く限界を抱えた人間同士の、あるいは弱者への共感、そしてメルヴィルが社会的弱者に示す共感力がある、という



大塚の指摘は一考に値する（大塚 497; 高尾他 28）。共感、マシーセンの民主主義に対立する概念として、バウムやトンプキンス以降の感傷小説研究者たちが前景化してきた価値だからだ。<sup>12</sup> 本稿では大塚の着想を『アメリカン・ルネサンス』全体に敷衍する。同書はエマソン（Emerson）、ソロウ（Thoreau）、ホーソーン（Hawthorne）、メルヴィル（Melville）、ホイットマン（Whitman）という5人の男性作家を扱っているが、ホーソーンとメルヴィルに多くの紙幅が割かれている（高尾他 20, 23）。また大塚のいうように、マシーセンの民主主義を共感という概念から捉え直す際は、ホイットマンも鍵を握る。本稿ではこの三人の作家に関する言及を中心に、マシーセンが19世紀の文学を評価する際に共感を重視していたことを論証する。本節では、三人の作家が作品内で描いた共感に対するマシーセンの肯定的態度に的を絞る。

手始めに、ホーソーンの『緋文字』（*Scarlet Letter*, 1850）を扱った箇所を見てみよう。マシーセンは、ホーソーンが社会の除け者になったヘスター（Hester）に対する民衆の共感を描いている、と論じる。「もし共感（sympathy）が期待できるとすれば、より寛大で温かな民衆の心からのものだろう」というヘスターの意識を作中から引用しつつマシーセンは、ヘスターの推測に違わず、「統治者」（rulers）よりも「民衆」（people）の方がいち早く彼女に共感を示した、と解釈する（348）。そして「この程度までホーソーンは共通の人間性（common humanity）を信頼していた」と続けるのだ（348）。<sup>13</sup> もっとも直後に彼は「ホーソーンは愛だけで十分といったロマンチックな単純化はしていない」と述べ、ホーソーンが同情や共感を手放しでは賞賛していない点を認めている（348）。しかし少なくとも彼は、ホーソーンが「この程度まで」社会的弱者に対する庶民の共感を信頼していた点を評価していたのである。

マシーセンは、メルヴィルが描いた庶民の共感も称える。『白鯨』（*Moby-Dick, or, The Whale*, 1851）のイシュマエル（Ishmael）が異教徒クイークエグ（Queequeg）に示した、相手も自分と同じ人間なのだという「他者への共感」（sympathy with another human being）（443）。『ピエール』（*Pierre, or, The Ambiguities*, 1852）のルーシー（Lucy）が、危機的状況にあったピエールに与えた「無私的愛」（unselfishness）（443）。これらは残酷なこの世の拠り所として提示されているという（443）。重要なことにマシーセンは、誰であれ一人の人間として尊重しなければならない、というメルヴィルの考え方が「民主主義への信奉」に由来する、と指摘する（442）。メルヴィルが信じた民主主義とは、新約聖書のコリント人への第一の手紙第十三章で表される「全き愛」（fullest charity）の考え方と合致するものだったという（Matthiessen 442）。<sup>14</sup> マシーセンは、メルヴィルが描いた異教徒や苦境下の人々に対する庶民の共感を、キリスト教のなかにある博愛主義的な民主主義と結びつけるのである。

マシーセンは、ホイットマンが謳う共感も民主主義と不可分な概念として提示する。ホイットマンが「大学人」（university people）ではなく「市井の人々」（everyday people）を民主主義の原点に据えていた、という見解を示した直後、マシーセンは、同詩人が人間の苦闘に対し「優しさ」（tenderness）を見せたことも称揚する（624-25）。そして、詩人の民主主義がトウェイン（Twain）に、「共感、連帯」（sympathy, solidarity）がドライサー（Dreiser）に継承されたことと述べ、ホイットマンが表す共感と民主主義を切り離せない一対の美德として論じるのである（625）。

以上見てきたようにマシーセンは、ホーソーン、メルヴィル、ホイットマンの著作が、弱者や苦境のなかで葛藤する人々に対する庶民の共感を描いている点を高く評価した。さらに後者二人

の描いた庶民の共感が、民主主義と切っても切れない関係にあることまで看取したのである。マシーセンの打ち出す共感が、庶民への温かい眼差しに裏打ちされている点も重ねて銘記しておきたい。彼の民主主義は大衆を排除するエリート中心の概念として批判されることが多い (Tompkins 199-200; Smith 3)。しかし、大衆を含む人間一般に思いやりを拡大していく包括的な理念として、彼の民主主義を認識し直す必要がある。

### Ⅲ．共感する読者メルヴィル

マシーセンは、フェミニスト批評家のトンプキンスやベイムと同じく、読者の共感を引き出す力にも文学的価値を置いていた。この点を検証するにあたり、マシーセンが読者としてのメルヴィルの目を通してホーソーンを語っている事実は見逃せない (高尾他 34)。本節では、マシーセンが読者メルヴィルの感情を揺さぶる魅力をホーソーン作品に認めていたことを詳らかにする。

マシーセンは、メルヴィルがホーソーンの著書に施した書き込みや、メルヴィルのエッセイ「ホーソーンと彼の苔」(“Hawthorne and His Mosses,” 1850)<sup>15</sup>を参考に、ホーソーン作品に対する読者メルヴィルの「共感」(sympathy) (253) や両作家の「類縁関係」(kinship) (255) を前景化する。メルヴィルがすぐに「反応」(response)したのは、ホーソーンが描く人間の「闇」だけでなく、彼の「『思いやりの深さ』」(‘depth of tenderness’)、<sup>16</sup>「『万物への限りない共感』」(‘boundless sympathy with all forms of being’)、<sup>16</sup>「『偏在する愛』」(‘omnipresent love’)、<sup>16</sup>すなわちメルヴィルが「ホーソーン」の精神と心のバランス」(Hawthorne’s balance between mind and heart) と呼ぶ、知性だけでなく感情も重んじる傾向だったという (Matthiessen 344)。メルヴィルの「反応」がどのようなものだったのか具体的な説明はない。しかし直後に、メルヴィル自身もホーソーン同様、「思考と感情の間に成立するある種の調和」(kind of harmony that might be established between thought and emotion) を描くことを最大の関心事としていたことが明かされる (345)。先の「反応」は、知性だけでなく感情も重視していたホーソーンへの親近感から来る、メルヴィルの共感を示唆していたと考えられる。

メルヴィルがホーソーン作品に感情面で惹かれていた、というマシーセンの考えは、他の箇所にも見てとれる。たとえば、メルヴィルが従来の作家像を更新するようなホーソーンの魅力を見つけた、という件がある (189-90)。そのなかでマシーセンは、メルヴィルがホーソーン作品の魅力シェイクスピア(Shakespeare)のそれになぞらえていたことを次のように語る。“... he [Melville] could already perceive in Hawthorne the same kind of ‘short, quick probings at the very axis of reality’ that had so impressed him in Shakespeare.” (189)メルヴィルがシェイクスピアに抱いた印象が「感銘を受けた」(impressed) という語で示され、さらにメルヴィルがそれと同種の魅力ホーソーンに「感知」(perceive) できた、と表される。この直後にもマシーセンは、メルヴィルがホーソーン文学につきまとう暗闇に「釘付けになり」(fixed)、「魅了された」(fascinated) という表現を用いている (190)。<sup>17</sup>読者メルヴィルを魅了したのはホーソーンの知的側面ではなく共感を誘う力だ、とマシーセンは示唆するのだ。

反対にマシーセンは、メルヴィルが共感できない作家、すなわちエマソンの価値を低く見積もる。メルヴィルがエマソンの『エッセイ集』(Essays 1844, 1847) を読んだ際の感想についてマシーセ

ンは、読者メルヴィルにとって「理念に突っ走る」エマソンの書いたものは、「知的」すぎて「息苦しさを覚える」(suffocated)ものだったと表現する(185)。エマソンのエリート的知性は、メルヴィルに拒絶反応をもたらすのだ。しかしこの反感は、メルヴィルが共感を呼ぶ作家ホーソンに出会うという「全くの僥倖」の序曲となっている(186)。エマソンは、共感を誘う力をもったホーソンの引き立て役、というわけだ。読者メルヴィルの共感を喚起する力が文学的価値の判断基準になっているといえる。

マシーセンが作品に共感する主体として想定したのは、男性読者メルヴィルであり、トンプキンスやベイムが焦点化したような大衆や女性の読者ではなかった。しかし少なくともマシーセンは、同時代の読者の心情に訴えかける魅力をホーソンの著作に認め、メルヴィルという読者の目を通じてそれを知的エリートのエマソンより高く評価した。共感に文学的価値を認める点で、マシーセンはフェミニスト批評家たちと立場を同じくしていたのである。

#### IV. 共感するマシーセン

恋人チェイニー (Cheney) と交わした書簡集の発表以来、マシーセンの私生活のセクシュアルな側面だけがクローズアップされてきた。しかし手紙は、彼が共感の人であったことも伝えている。チェイニー宛ての手紙のなかでマシーセンは、彼との出会い以来ホイットマンの読み方が変わった、と打ち明ける (Hyde 26)。単に「知的刺激」を与えてくれるだけだったこの詩人が、自分も「その世界を生きている」(I'm living it) と実感できる存在、つまり共感の対象に転じたというのだ (Hyde 26)。マシーセンは、この詩人の“So Long”という詩の一部を抜粋し、そのなかで使われる複数の形容詞が、「自分たちの関係性」の「かなり多くの要素」を言い当てている、と綴る (26)。それら形容詞のなかには、“affectionate”や“compassionate”という愛情や同情の深さを表す語が含まれる (26)。つまりマシーセンは、ホイットマンが用いたそれらの語でもって、自身が別の手紙で“complete harmony” (Hyde 18) とも“*Our union*” (Hyde 24) とも呼ぶ、チェイニーとの共感で結ばれた関係を言い表そうとするのだ。翻ってフェミニスト批評家ベイムは、感傷小説のヒロインの心情になりきる読者の「同一化」を指摘した。共感する作家の言葉で自らの見方を代弁させるマシーセンは、作家の視点に同一化している、と見ることもできる。手紙は、作家に同一化してしまうほど共感しやすい読者だったマシーセンの一面を垣間見せるのだ。

私信に表れたマシーセンの共感傾向は、『アメリカン・ルネサンス』における批評的スタンスにも反映されている。というのも彼は、作品の価値を共感という尺度で測るという批評的次元を踏み越え、自ら作家の視点に同一化しているからだ。ホーソンの共感力に対するメルヴィルの好意的見方を示す件で、マシーセンは次のように述べる。“And as Melville conceived it, this power to sympathize with humanity could not exist in the ‘high form called genius’ without ‘the indispensable complement of ... a great, deep intellect which drops down into the universe like a plummet.’” (190)<sup>18</sup> ここでマシーセンはメルヴィルを引用しつつ、ホーソンの共感力は天才という高みにおいて成り立つのではなく、森羅万象の深いところまで降りていくような知性による補完が不可欠だ、と述べている。マシーセンはメルヴィルの見解を示す引用をした後で、そこに書かれた内容の真偽を問うのではなく、asの使用によって一文のなかにメルヴィルの視点と自身の視点を併置する。マ

シーセンはメルヴィルと自己を区別することなく、ほとんどメルヴィルに自身の批評的立場を仮託するのだ。

マシーセンは、お気に入りの作家ホイットマンにも自分の意見を託す。彼はホイットマンがメルヴィルの『タイピー』(Typee, 1846)、『オムー』(Omoo, 1847)以降の作品を読んだ形跡は無い、と断った上で、こう述べる。“... he [Whitman] would certainly have responded to Melville's warmth of feeling for Jack Chase, the heroic full-blooded foretopman in *White Jacket*, as well as to that book's exposure of undemocratic abuses.” (498) 仮にホイットマンが『ホワイト・ジャケット』(1850)を読んでいたとしたら、きっと彼は、登場人物に対するメルヴィルの温かな感情や作品の非民主主義的な悪習の暴露に好意的に反応しただろう、とマシーセンは示唆している。ポイントは仮定法過去完了形の使用だ。マシーセンは、もしホイットマンがメルヴィル作品を読んでいたとすればどう感じたか、ホイットマンの心情になりきって推測している。このときマシーセンは、メルヴィルに対する自分の文学的評価を想像上のホイットマンの心情に託すと同時に、そこに己の心情を没入させている。作家に同一化する私人マシーセンの共感傾向は、批評家としての仕事にも影響しているのだ。

## 結び

感傷小説研究は、女性を排除したという理由でマシーセンの民主主義を糾弾し、これとは相反する価値として共感を打ち出してきた。しかし共感の人マシーセンの民主主義は、排他的であるどころか、庶民を含むあらゆる人間に対し温かな思いやりを開いていく包括的な理念である。たしかに彼は女性作家を議論の俎上には載せていないが、後にトンプキンスやベイムが感傷小説に見いだすことになる、読者の共感を誘う力を文学基準に含めていた。さらに彼は、人間の苦闘に対する作家の優しさ、作品内で描かれる庶民の同情心、共感で結ばれる作家同士の絆など、共感に関わる多様な価値を男性作家の著作から引き出してもいた。男性作家を共感という基準から評価する点において、彼は『センチメンタルな男たち』に先んじていたともいえる。マシーセンは感傷小説研究者の敵ではない。両者の間に共感は成立するだろう。

## Notes

※本稿は、日本ナサニエル・ホーソーン協会第63回九州支部研究会(2016年6月25日、於北九州市立大学)において、「共感するマシーセン——感傷小説研究における『アメリカン・ルネサンス』批判再考——」と題して口頭発表した原稿に大幅な加筆修正を加えたものである。なお、本稿は平成27年度科研費助成事業(学術研究助成基金助成金)挑戦的萌芽研究、課題番号15K12857による援助を受けている。ここに記して感謝申し上げます。

1. アメリカの感傷小説研究は、元を辿ればE・ダグラス・ブランチ(E. Douglas Branch)の『感傷の時代——1836-1860』(*The Sentimental Years: 1836-1860*, 1934)まで遡る。しかし、センチメンタリズムを女性特有の性質とみなし、女性作家の作品を肯定的に評価する批評の流れを

- 作ったのは、1970年代以降に登場するフェミニスト批評家たちだった。大野「感傷小説研究史とジェンダー」2-6を参照。
2. 同書のタイトル訳は翻訳版に従った。本文中からの引用の日本語表記等も、翻訳版を参考にしている。ただし頁数は英語版のものを指す。
  3. トンプキンスが男性批評家の代表格としてマシーセンを念頭に置いていた、という見解については大井25も参照。なお、トンプキンスの著書の和訳は舌津智之訳を参考にした（『抒情するアメリカ』11）。
  4. バイムについては大野「キャンオンとは何か?」；トンプキンスについては大野「感傷小説研究史とジェンダー」6-9参照。
  5. 一例としてLubovichの論考が挙げられる。男性とセンチメンタリティを結びつける潮流については、大野「感傷小説研究史とジェンダー」29-30も参照。
  6. その後の感傷小説研究でも、マシーセンの民主主義は男性中心的であるとみなされ続けている。たとえばRosenthal 24；進藤6参照。
  7. De Jong 7；Dobson 266-67；Chapman and Hendler 4；Weinstein I参照。
  8. Tompkins xix, xvi, 125参照。
  9. バイムは、男性批評家たちが文学作品中の女性を現実と懸け離れた神話的イメージのなかに固定化してきた、との説を展開している（Baym, “Melodramas” 132, 133；大野, 「キャンオンとは何か?」161-64）。
  10. 『アメリカン・ルネサンス』出版直後の受容についてはVanderbilt 479-80、文学史家としてのマシーセンの功績を称える論考としてBercovitch 631やGraff 219、マシーセンの批評的スタンス、政治的スタンス、セクシュアリティ等を総合的に評価する論考としてCainや前川、マシーセンの民主主義が男性しか考慮していないことを指摘する初期の批評としてSmith、ナショナリズムの論理に包摂された左翼知識人としてマシーセンを批判する論考としてArac、マシーセンが上げた作家を大衆文化との関わりから読み直す試みとしてRaynolds、日本における受容については城戸を参照。
  11. 同書にマシーセンのセクシュアリティの抑圧を読む批評家としてCainやGrossman、ホモセクシュアリティに対する肯定的評価を読む批評家としてCadden参照。これらの批評動向については舌津「アメリカ文学史の見直し論争」121-24に詳しい。なお同書で舌津は、マシーセンがフェミニスト詩人に与えた影響を指摘し、「詩学の復権を訴えるサブヴァーシヴなジャンル論」として『アメリカン・ルネサンス』を再評価している（132）。
  12. シンディー・ワインスタイン（Cindy Weinstein）は、感傷小説研究の多くが共感（sympathy）を出発点にしている、と指摘する（2）。
  13. トンプキンスによると、ホーソン作品は、19世紀には「あらゆる人間的なものへの共感」（sympathy with everything human）、「共通の人間性」（common humanity）、「人間誰もがもつ共感力」（universal human sympathy）といった語句で賞賛されていた（17）が、20世紀に入ると象徴の複雑さ、心理的深み、モラルの機微、文章の厚みといった基準で評価されるようになったという（11）。しかしマシーセンは、トンプキンスが19世紀特有の基準として挙げたのと同じ「共通の人間性」という語句でホーソンを賞賛している。よって彼は、トンプキンス

がイメージする 20 世紀のエリート主義的な批評家のステレオタイプには当てはまらない。19 世紀アメリカ社会に大きな思想的影響を与えたのは、人間に共通の道徳的判断の基準が存在することを前提とするスコットランドのコモン・センス哲学だった。19 世紀の書評家や作家が「共通の人間性」という概念を内在化していた可能性は高く、20 世紀の批評家マシーセンにもその影響を見ることができるかもしれない。アメリカにおけるコモン・センス哲学の影響については、Howard 70-71; De Jong 1; Martin 113; Court 66-73 を参照。メルヴィル作品とアダム・スミス (Adam Smith) の共感論との関係性について考察した論考として藤本を参照。なお、こうした思想的背景を踏まえ、本稿では “common humanity” を「共通の人間性」と訳したが、翻訳版では「一般庶民の人間性」と訳されている (マシーセン, 下巻 560)。

14. マシーセンがメルヴィルの共感力をキリスト教に帰している、と指摘する論考として Rosengarteb 208 を参照。
15. 同エッセイについては、橋本安央訳も参照。ただし本稿中の同エッセイからの引用の頁数は英語版からのものである。
16. Melville 242 からの引用と考えられる。
17. メルヴィルは、“Now it is that blackness in Hawthorne, of which I have spoken, that so fixed and fascinates me.” (244) とホーソーンを賞賛した直後、以下のようにシェイクスピアの魅力を語り、両作家を同列に扱っている。“But it is those deep far-away things in him; those occasional flashings-forth of the intuitive Truth in him; those short, quick probings at the very axis of reality; — these are the things that make Shakespeare, Shakespeare.” (Melville 244)
18. メルヴィルによる原文は以下の通り。“— there is no man in whom humor and love are developed in that high form called genius; no such man can exist without also possessing, as the indispensable complement of these, a great, deep intellect, which drops down into the universe like a plummet.” (Melville 242)

### Works Cited

- Arac, Jonathan. “F. O. Matthiessen: Authorizing an American Renaissance.” *The American Renaissance Reconsidered*. Ed. Walter Ben Michaels and Donald Pease. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1985. 90-112.
- Baym, Nina. “Melodramas of Beset Manhood: How Theories of American Fiction Exclude Women Authors.” *American Quarterly* 33.2 (1981) : 123-39.
- . *Woman’s Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-1870*. Ithaca: Cornell UP, 1978.
- Bercovitch, Sacvan. “The Problem of American Literary History.” *Critical Inquiry* 12.4 (1986) : 631-53. *JSTOR*. 1 June 2016 <<http://www.jstor.org/stable/1343431>>.
- Branch, Douglas E. *The Sentimental Years: 1836-1860*. 1934. New York: Appleton-Century, 1965.
- Cadden, Michael. “Engendering F. O. M: The Private Life of *American Renaissance*.” *Engendering Men: The Question of Male Feminist Criticism*. Ed. Joseph A. Boone and Michael Cadden. London: Routledge, 2012. 26-35.

- Cain, William. *F. O. Matthiessen and the Politics of Criticism*. Madison: U of Wisconsin P, 1988.
- Chapman, Mary, and Glenn Hendler. Introduction. *Sentimental Men: Masculinity and the Politics of Affect in American Culture*. Ed. Chapman and Hendler. Berkeley: U of California P, 1999. 1-16.
- Court, Frankline. *The Scottish Connection: The Rise of English Literary Study in Early America*. Syracuse: Syracuse UP, 2001.
- De Jong, Mary, and Paula Bernat Bennett, eds. *Sentimentalism in Nineteenth-Century America: Literary and Cultural Practices*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2013.
- Dobson, Joanne. "Reclaiming Sentimental Literature." *American Literature* 69.2 (1997) : 263-88.
- Graff, Gerald. *Professing Literature: An Institutional History*. Chicago: U of Chicago P, 1987.
- Grossman, Jay. "The Canon in the Closet: Matthiessen's Whitman, Whitman's Matthiessen." *American Literature* 70.4 (1998) : 799-832. *JSTOR*. 13 May 2016 <<http://www.jstor.org/stable/2902392>>.
- Howard, June. "What Is Sentimentality?" *American Literary History* 11 (1999) : 63-81. *Oxford Journals*. 31 July 2008 <<http://alh.oxfordjournals.org>>.
- Hyde, Louis, ed. *Rat and the Devil: Journal Letters of F. O. Matthiessen and Russell Chaney*. Boston: Alyson, 1978. Lubovich, Maglina. "Desired and Imagined Loss at Sympathetic Identification: Donald Grant Mitchell's *Reveries of a Bachelor*." De Jong and Bennett 123-39.
- Lubovich, Maglina. "Desired and Imagined Loss as Sympathetic Identification: Donald Grant Mitchell's *Reveries of a Bachelor*." De Jong and Bennett 123-39.
- Martin, Terence. *The Instructed Vision: Scottish Common Sense Philosophy and the Origin of American Fiction*. Bloomington: Indiana University P, 1961.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. London: Oxford UP, 1949.
- Melville, Herman. "Hawthorne and His Mosses." *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*. Ed. Harrison Hayford, Alma A. MacDougall, and G. Thomas Tanselle. Evanston: Northwestern UP; Newberry Library, 1987. 239-53.
- Raynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Rosengarten, Frank. *Urbane Revolutionary: C. L. R. James and the Struggle for a New Society*. Jackson: UP of Mississippi, 2008.
- Rothenthal, Caroline. "Drinks, Domesticity and the Forging of an American Identity in Susan Warner's *The Wide, Wide World* (1850)." *Drink in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*. Ed. Susanne Schmid and Barbara Schimidt-Haberkamp. London: Routledge, 2016. 23-34.
- Smith, Henry Nash. *Democracy and the Novel: Popular Resistance to Classic American Writers*. New York: Oxford UP, 1978.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985.
- Vanderbilt, Kermit. *American Literature and the Academy: The Roots, Growth, and Maturity of a Profession*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1986.

- Weinwtein, Cindy. *Family, Kinship, and Sympathy in Nineteenth-Century American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- F.O. マシーセン『SUS モダン・クラシックス叢書 アメリカン・ルネサンス——エマソンとホイットマンの時代の芸術と表現（上・下）』飯野友幸・江田孝臣・大塚寿郎・高尾直知・堀内正規訳 上智大学出版 2011.
- 大井浩二『センチメンタル・アメリカ——共和国のヴィジョンと歴史の現実——』関西学院大学出版会 2000.
- 大塚寿郎 訳者解題 マシーセン下巻 481-99.
- 大野瀬津子「感傷小説研究史とジェンダー——Jane Tompkins の *Sensational Designs* を中心に——」*Kanazawa English Studies* 29 (2016) : 1-14.
- 「キャノンとは何か？——ポール・ラウターとニーナ・ベイムによる 1980 年代の論文のレトリックを考察する」『中・四国アメリカ研究』8 (2017) : 157-70.
- 城戸光世「日本における＜アメリカン・ルネサンス＞ルネサンス」『中・四国アメリカ文学研究』52 (2016) : 16-19.
- 進藤鈴子『アメリカ大衆小説の誕生——1850 年代の女性作家たち』彩流社 2001.
- 舌津智之「アメリカ文学史の見直し論争——マシーセンの万華鏡」『アメリカ——文学史・文化史の展望』亀井俊介監修 平石貴樹編 松柏社 2005. 115-140.
- 『抒情するアメリカ——モダニズム文学の明滅』. 研究社, 2009.
- 高尾直知・舌津智之・大塚寿郎・飯野友幸「『アメリカン・ルネサンス』再考＜特集・よみがえる古典・シンポジウム＞」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究』58.4 (2010) : 11-51.
- ハーマン・メルヴィル「ホーソンと彼の苔」橋本安央訳『Metropolitan II -1』57 (2015) : 1-20.
- 藤本幸伸「共感から法、そして言葉へ：Melville の道徳論」『中・四国アメリカ文学研究』39 (2003) : 1-9.
- 前川玲子「アメリカ知識人と批評の時代——F. O. Matthiessen をめぐって——」『同志社アメリカ研究』23 (1987) : 1-10.



## Sympathetic Matthiessen:

### Rethinking the Criticism of *American Renaissance* in the Studies of Sentimental Novels

OHNO Setsuko

In *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (1941), F. O. Matthiessen points to a “devotion to the possibility of democracy” as a common denominator of five writers he takes up. The studies of sentimental novels began when feminist critics in the 1970s and the 1980s such as Jane Tompkins and Nina Baym, blamed Matthiessen’s democracy for excluding women. These critics placed a high value on women authors from a viewpoint of sympathy. After the publication of *Sentimental Men* (1999), scholars have described the writings of male authors as having sympathetic dimensions. Up until now, however, Matthiessen’s reputation as an androcentric critic remains unchanged. The purpose of this essay is to argue that Matthiessen regards sympathy as an important element of literary works just as those feminist critics do, and to reconsider the criticism that he has faced.

The early feminist critics praised sentimental novels for having appealed to the emotions of readers. Jane Tompkins, who opposed the elite-oriented literary tradition, exaggerated the works’ value to impress general public. Nina Baym, on the other hand, pays attention to the works’ charm to enable women readers to identify with heroines.

Matthiessen places emphasis on common people’s sympathy with a social outcast in Hawthorne’s writing. Moreover, he associates Whitman’s as well as Melville’s compassion on people who are suffering with an ideal of democracy. Matthiessen’s democracy is not exclusive since it is inseparable from the sympathy that is shown to people in distress.

Furthermore, Matthiessen shares with the feminist critics the critical stance to attach importance to the texts’ power to move readers’ emotions. He introduces Melville as a reader. According to him, Melville was emotionally charmed by Hawthorne’s writings, while being distressed and bothered by the elitist aspect of Emerson. By describing Emerson as a foil to Hawthorne, Matthiessen reveals his favor for the writer who evokes sympathy of a reader, Melville.

As his letters disclosed, Matthiessen himself was a very sympathetic person, and we can see the reflection of such tendency in *American Renaissance*. For example, he identified with Melville so much that his viewpoint became indistinguishable from the writer’s. Also, he used Whitman’s perspective to express his own view.

Although not discussing women writers, Matthiessen had adopted the same criterion as the feminist critics in the 1970s and the 1980s did. In addition, he had noticed in male authors’ works various aspects of sympathy, prior to *Sentimental Men*. We can conclude that Matthiessen had opened up new dimensions of sympathy for the scholars of sentimental novels.

## 中・四国アメリカ文学会第45回大会シンポジウム

## アメリカ文学の独立

## まえがき

松島欣哉

かつて、アメリカ文学には正典と呼ばれるものがあつた。それがエスニシティー、フェミニズム、セクシャリティー等の観点の導入とともに正典は相対化され、アメリカ文学は周縁を拡大し、その領域は拡散の一途を辿って久しい。

Stephen Greenblatt は、21世紀に入って最初に発行された *PMLA* において、宗主国イギリス以外の地域から英語で書かれた優れた作品が次々と出版される状況に鑑み、「イギリス文学史は（中略）主としてこの国民の運命に関するものであることを止めてしまった」（53）と言った。それから2年後、同じく *PMLA* において、Paul Giles は「アメリカ文学は（中略）国家の領土と大陸間の空間との往還が体系的に絡み合ったものとして見られねばならない」（63）と、アメリカ文学はもはやアメリカ一の内部状況の反映ではなく、国際社会との相互作用の現れだと言った。

このような状況のなかで、今「アメリカ文学の独立」をシンポジウムのテーマとして立てることに何の意味があるのかと問われそうだが、私自身はここで、「独立」という言葉に、作家が自立して行く際に他（国）の作家と峻別できる独自性を求める意識という意味を込めてみたい。グローバルズムや惑星思考といった術語で作家を切り取ることは、現代の輻湊する社会におけるその作家の新たな側面を析出するという点で意味深い。しかし、それと同時に、その作家が独自性を持った作家たろうとしたことに様々な角度から光を当て、彼/彼女の根っこの確認を絶えず行うことも必要であろう。個別性を突き抜けたところに、普遍性があると信じるからだ。

Washington Irving の *The Sketch Book* が1819年から1820年にかけて出版され、William Cullen Bryant の最初の詩集 *Poems* および James Fenimore Cooper の *The Spy* が1821年に出版されたことを理由に、アメリカ文学の誕生を1820年代の始めに定めるのが定説である。しかし、アメリカ文学が急に産まれ出た訳ではないことは当然のことだ。本シンポジウムでは、まず、松島が「超絶主義者たちと国民文学」と題し、1776年の独立直後の Noah Webster から1800年代半ばの Emerson および Fuller まで、アメリカ国民文学を求める言説を辿った。

つぎに、山口善成氏が「笑う歴史家—ワシントン・アーヴィングによるアメリカ文学はじまりの空騒ぎ」と題し、Irving の最初の単著 *A History of New York* (1809) を主たる題材にし、パブリシストとしてのアーヴィングに焦点を当て、「アメリカ文学」の成立事情を再考された。

3番目に、本岡亜沙子氏が「オルcottの短篇小説と新しいアメリカの教養」と題し、Louisa May Alcottの短編、“Buzz”(1868)、“A Curious Call”(1869)、“Little Neighbors”(1874)、“A Hole in the Wall”(1883)を対象に、ヨーロッパの自己修養としての教養に対置されるアメリカの自己表現としての教養の在り様を考察された。

最後に、山内玲氏が「*Philadelphia Fire*にみる*The Tempest*の翻案と黒人男性であることの困難」と題し、アフリカ系現代作家John Edgar Wideman(1941-)の*Philadelphia Fire*(1990)における*The Tempest*の翻案に焦点をあて、キャリバンの性に重ね合わされるアフリカ系アメリカ人の男性性の問題を考察された。

本シンポジウムでは、「独立」という言葉の意味をパネリスト独自の解釈に委ねていたので、上記の私自身の解釈にこだわらず、幅広い議論をしてもらった。議論に纏まりがなく拡散してしまったとの懸念もあるが、それはそれで、今のアメリカ文学の状況を反映しているように思える。

#### Works Cited

- Giles, Paul. “Transnationalism and Classic American Literature.” *PMLA*, vol. 118, no. 1, Jan. 2003, pp. 62-77.
- Greenblatt, Stephen. “Racial Memory and Literary History.” *PMLA*, vol. 116, no. 1, Jan. 2001, pp. 48-63.

## 超絶主義者たちと国民文学

松島欣哉

### はじめに

1776年に独立宣言を発し、1783年のパリ条約で世界的に主権国家としての存在が認められて以降、これまでヨーロッパにはなかった個人の広範な自由を基礎を置く民主主義という政治体制と自由で活発な経済活動による物質的繁栄によって、アメリカ人は自信を深めるようになる。さらに1812年に始まる第二次対英戦争に勝利すると、アメリカ社会にはナショナリズム意識が顕著になってくる。それと同時に、アメリカ人の国民文学の必要性の意識も高まって来た。

本発表の目的は、独立直後から1800年代中盤までのアメリカにおける国民文学を求める機運の高まりを、イギリスにおけるアメリカ文学の認知と絡めながら辿ることである。

### I . 1820年代までの状況

#### 1. Noah Webster (1758–1843)

辞書編纂者のノア・ウェブスターは、アメリカが正式に独立を果たした1783年に出版した *A Grammatical Institute of the English Language* の序文で、「この国は、すでに政治上・宗教上の制度の自由によってそうであるように、将来文学上の発展の優越性によって名を馳せるにちがいない」(Webster “Introduction”) と述べた。さらに1788年には、彼が編集していた雑誌 *American Magazine* に掲載した “On the Education of Youth in America” を以下のように結んでいる。

Americans, unshackle your minds, and act like independent beings. You have been children long enough, subject to the control, and subservient to the interest of a haughty parent. You have now an interest of your own to augment and defend. . . . [T]he Americans must believe — and act from the belief — that it is dishonorable to waste life in mimicking the follies of other nations and basking in the sunshine of foreign glory.

(Webster, *A Collection of Essays and Fugitiv[sic] Writings* 36)

ここで注目すべきは、1783年の序文ではアメリカはヨーロッパ諸国の叡智を吸収し悪弊を排除すべきだと理性的に主張しているのに対し、1788年には祖国イギリスからの精神的束縛を脱し、いわば「知的独立」を果すよう、熱っぽく唱えている点である。これはエマソンが “The American Scholar” (1837) を講演する50年前のことであった。

#### 2. Walter Channing (1786–1876)

William Tudor (1779–1830) たちによって、1815年に創刊された *The North American Review* の第一巻第三号には、“American Language and Literature” と題する匿名の評論が掲載された。これは、

当時ハーヴァード大学で助産学の講師をしていたウォルター・チャニングが投稿したもので、そこで彼は、国民文学は「国語」(national language)の正統な所産であるとの論を展開したあと、次のように続けた。

If then we are now asked, why is this country deficient in literature? I would answer, in the first place, because it possesses the same language with a nation, totally unlike it in almost every relation; and in the second, [it] delights more in the acquisition of foreign literature, than in a laborious independent exertion of its own intellectual powers. (Walter Channing 307-08)

チャニングはこの評論で、「ほぼあらゆることに関連して似ても似つかぬ国と同一の言語を所有している」ことが国民文学が生まれにくい理由だという点に関して、ナイヤガラ滝やミシシッピ川といったアメリカの壮大な自然環境を念頭に置いて、「偉大で他と異なる特徴を示す」「国土の特異性」(peculiarities of country)や風習を表現するには、「英語」(English language)では不十分であり、「独自の言語」(peculiar language)が必要であると説明する(309)。続いて、文学の独創性という観点から、一国民がその「国民的特異性」(national peculiarities)を所有し慈しむことが欠かせないと説く。彼はアメリカ文学の創出に必要な欠くべからざるものとして、アメリカ語の創造とアメリカ的特性の涵養を強調したのであった。

### 3. Sydney Smith (1771-1845)

アメリカ人の国民文学を求める意識を高めるのに役立ったのは、1812年戦争の終結以降とくに激しさを増した、イギリスの雑誌に掲載された、アメリカ人およびアメリカ文化に対する非難・中傷であった。そのなかで、アメリカの文人たちに対する非難としてよく引用されるのがシドニー・スミスの難詰である。

イギリス人聖職者で、*The Edinburgh Review*の創設者の一人でもあるシドニー・スミスは、1820年1月号に、アメリカ人の政治家であるAdam Seybertが編集した*Statistical Annals of the United States of America*(1818)の書評を掲載した際、最近のアメリカ人の講演者や新聞が、自国民を「世界中で最も偉大で、最も洗練され、最も文明開化の進んだ、最も道徳的な国民」(Smith 78-79)と大言壮語していることに反発し、以下のように難詰したのであった。

During the thirty or forty years of their independence, they have done absolutely nothing for the Sciences, for the Arts, for Literature, or even for the statesman-like studies of Politics or Political Economy. . . . In the four quarters of the globe, who reads an American book? or goes to an American play? or looks at an American picture or statue? (Smith 79)

スミスの難詰は、これより少し前から興っていたイギリスの文芸雑誌とアメリカの雑誌との間の、いわゆる「紙の戦争」(paper war)を煽る結果となった。

## II . 超絶主義者たちと国民文学

### 1. William Ellery Channing (1780-1842)

ユニテリアン派の牧師であるチャニングは*The Christian Examiner*の1830年1月号に、政治家Charles Jared Ingersollによる書籍化された講演“*Influence of America on the Mind*”に対する書評の形をとって、彼自身の国民文学論を掲載した。このときの欄外見出しは“*National Literature*”であっ

た。ここでチャニングは国民文学を発展させるには、イギリス人の非難に対する反論としてインガソルが誇った、中等教育の普及と実用的知識の蓄積では不十分で、「高貴な知識人仲間 (a noble intellectual brotherhood)」(W. E. Channing, “Remarks on National Literature” 124) である「天賦の才を授かった少数者 (the gifted few)」(130) を育成することが必要だ、と主張した。

牧師であるチャニングが国民文学を求める時代精神に竿さして貴族主義的文学論を展開した背景には、Andrew Jackson (1767–1845) に率いられた一般大衆のエネルギーにより気圧された従来の支配階級に対し、外国に対抗できる知的活動の主体が彼ら自身であることをもう一度自覚させる意図があったと思われる。チャニングは「手仕事に従事している人々」(W. E. Channing, “Self Culture” 12) を対象にした講演を、1838年9月にボストンでおこなった。そのなかで彼は個人のレベルでの自己改革・向上を目指すことを求め、いき過ぎた党派心は自己修養の敵であると、注意を喚起している (27)。チャニングは、ジャクソン流民主主義が階級間の対立を煽る結果を招き、社会改革にばかり目が向き、その結果として自己修養から目を背けることになる弊害を懸念していたのである。

### 2. Orestes A. Brownson (1803–1876)

オレステーズ・A・ブラウンソンは、長老派からユニテリアン派、最後にはカトリックへと宗派を渡り歩いた牧師であるが、一時期、エマソンやソローたちと親交があり、超絶主義者たちの討論サークルである Transcendental Club にも短期間ながら参加した。

ブラウンソンは、1838年7月にエマソンがダートマス大学でおこなった “Literary Ethics” と題する講演の批評を、*Boston Quarterly Review* の1839年1月号に掲載した。この講演でエマソンが表明した、文学は個人の内面の深みから出て来るものであるとの態度に反発し、ブラウンソンは「[文学は] 国民生活の表出であり具現だ。その性格はあれこれの一個の人間ではなく、国民精神 (national spirit) によって決定される」(Brownson, “American Literature” 146) と述べた。ブラウンソンは、1839年9月にブラウン大学でおこなった講演ではより強い口調で以下のようにかたまった。

[I]t is only they who conform to it[democracy], not from policy, but from the heart, from the real love of democracy, and a full understanding of what it is, that can do much to advance American literature. (Brownson, “An Oration on American Literature” 203)

文学と民主主義とを直接結びつけて論じるブラウンソンのこの姿勢は、その後、Walt Whitman の *Democratic Vistas* (1871) に引き継がれることになる。

### 3. Ralph Waldo Emerson (1803–82) and Margaret Fuller (1810–1850)

1836年、エマソンとユニテリアン派の牧師 Frederic Henry Hedge (1805–1890)、George Ripley および George Putnam が「超絶クラブ」を結成すると、エマソンと知り合いになっていたマーガレット・フラーは、この討論サークルに参加するようになる。そのうち彼らは、独自の機関誌を発行することになり、フラーは1840年から2年間、*The Dial* の最初の編集長を務めた。1840年7月に刊行された『ダイアル』の第1巻第1号には “The Editors to the Reader” と題する創刊の辞がある。これは最初フラーが書いたものにエマソンが手を加えて書き直したもので、エマソンの声とフラーの声とを聞き分けることは不可能である。

編者たちは、「出版の辞」で以下のように言っている。

As we wish . . . to report life, our resources are therefore . . . the discourse of the living, and the

portfolios which friendship has opened to us. From the beautiful recesses of private thought; from the experience and hope of spirits which are withdrawing from all old forms, and seeking in all that is new somewhat to meet their inappeasable longings . . . we hope to draw thoughts and feelings, which being alive can impart life. (“The Editors to the Reader” 4)

自己信頼を生きる全ての人々が新たな文学の担い手となると考えるエマソンとフラーの態度は、チャニングの貴族主義的態度とは対照的に、民主主義的と呼んでもよからう。

むすび

以上、アメリカの政治的独立以降に顕著となる、アメリカ文学の独立を求める声を追ってきたが、注目すべきは、これを論じる人々が文人に限らず、医者・政治家・牧師といった、幅広い職種の人々であることだ。独自の文学を確立することと国家意識とが分ちがたく結びついていることの証左であろう。

Works Cited

- Brownson, Orestes A. “American Literature.” 1839. *The Early Works of Orestes A. Brownson*, edited by Patrick W. Carey, vol. IV, Marquette UP, 2003, pp. 133-52.
- . “An Oration on American Literature.” 1840. *The Early Works of Orestes A. Brownson*, edited by Patrick W. Carey, vol. V, Marquette UP, 2004, pp. 197-214.
- [Channing, Walter.] “American Language and Literature.” *The North American Review*, vol. 1, no. 3, Sep. 1815, pp. 307-14.
- <http://ebooks.library.cornell.edu/cgi/t/text/text-idx?c=nora;cc=nora;view=toc;subview=short;idno=nora0001-3>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Channing, William Ellery. “Remarks on National Literature.” 1830. *The Works of William E. Channing, D.D.*, Part 1, Kessinger, [2010], pp. 124-38.
- . “Self-Culture.” 1839. *The Works of William E. Channing, D.D.*, Part 1, Kessinger, [2010], pp. 12-36.
- Curti, Merle. *The Growth of American Thought*. 3rd ed., Transaction, 2004.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Vol. 13, edited by Ralph H. Orph and Alfred R. Ferguson, Belknap P of Harvard UP, 1977.
- [Emerson, Ralph Waldo and Sara Margaret Fuller.] “The Editors to the Reader.” *The Dial: A Magazine for Literature, Philosophy, and Religion*, vol. 1, no. 1, Boston, 1840, pp. 1-4.
- Smith, Sydney. “America.” *Edinburgh Review*, vol. 33, Jan. 1820, pp. 69–80.
- <http://dspace.wbpublibnet.gov.in:8080/xmlui/handle/10689/13942>. Accessed 30 Nov. 2016.
- Webster, Noah. Introduction. *A Grammatical Institute of the English Language*. Part I. Boston, 1783. <http://www.donpotter.net/pdf/webster-1783.pdf>. Accessed 30 Nov. 2016.
- . “On the Education of Youth in America.” *A Collection of Essays and Fugitiv Writings*. Boston, 1790, pp. 1-37.
- <https://archive.org/details/collectionofess00webs>. Accessed 30 Nov. 2016.

## オルcottの短篇小説と新しいアメリカの教養

本 岡 亜沙子

### はじめに

国民意識の形成に活字メディアが果たす役割は大きい。出版資本主義の発展にともない出版語が普及すると、共通言語を持つ読者の間で情報や知識が共有される。それは次第に、それまで希薄であった国境という意識を彼らに芽生えさせ、国民国家というフィクションを生み出していく。ナショナリズムの情念を励起するこのような言語の役割をベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson) は主著『想像の共同体』(*Imagined Communities*) で鮮やかに論じた(24-26)。こうした読書経験を通じた国民的連帯は、南北戦争後のアメリカでも期待されたものであった。印刷技術や流通形態、郵便制度など各種出版インフラが整備されるとともに、公教育制度の確立により識字率が高まり、未曾有の読者層が出現した時代において、市場に出回る玉石混交の作品を取捨選択し、アメリカ独自の文学的系譜を立ち上げる機運が高まったわけである。それはたとえば、作家ジョン・ウィリアム・ド・フォレスト (John William DeForest, 1826-1906) が雑誌『ネイション』(*The Nation*) に寄せた小論「偉大なるアメリカの小説」(“The Great American Novel” 1868) に見てとれる。ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) が頭字語 GAN で広めたことでもよく知られるこのタイトルは、アメリカの古典を欲する国民感情を鼓舞するのに一役買うものとなった。

ヨーロッパの文化的遺産とアメリカのものどちらが優れているかという新旧論争は、古典に対する人々の関心や態度を次第に変化させていく。すなわち、古典が含み持つ歴史や教養には興味を示さず、古典のイメージを消費の対象とする皮相な流行が起きた。名著に親しみ人格の陶冶に努めるのではなく、古典にまつわる歴史や美術への興味関心や見識の深さ、さらには自身の財力を示すため、古典書を書棚に並べ、家具調度やレプリカの絵画で部屋を設える人々が増えたわけだ。かつて自己修養を担う古典の教養を指していたカルチャーという言葉は、大衆文化を意味するようになった。

では、古典古代に範を置かず消費に取り憑かれた時代において、人々はどのように文学との関わりにおいて内面を向上させていくのか。娯楽に道徳をすべり込ませるのを得意とした大衆作家ルーザ・メイ・オルcott (Louisa May Alcott, 1832-88) の短篇作品は、古典の影響力を顧みずつきすむアメリカにおける新たな教養について有効な視座を与えてくれる。

### 1

アメリカでは、1850年から1890年にかけて、カレッジ数が約3倍、学生数が約4.5倍に増えた (Geiger 133)。多様な学生に門戸を開く上で大学は、大衆化教育への移行に伴うカリキュラム改革



を行うようになった。その要となったのは、ハーバード大学総長チャールズ・ウィリアム・エリオット (Charles William Eliot, 1834-1926) が物議をかもしながらも主導した選択科目制度の導入であった。その改革により、古典語は必修科目から自由選択科目に変わり、古典語の識字も入学要件から外れた。「若者から古典的遺産を奪った罪」(Morison 290) を問われ、近隣大学から激しい非難を浴びたこの強硬策だが、紆余曲折を経て、この改革案はハーバード大学をはじめ全米各地の大学で取り入れられた。民主主義の名のもとに、学生の自主性と学問選択の自由を認めるというエリオットの教育理念が受け入れられたからだ (カーノカン 22)。その結果、教師の教条的な講義やギリシャ語やラテン語のテキストの暗唱を繰り返す原書講読ではなく、古代史や美術史を受講し古典的文化を学ぶ学生や、自然科学科目を履修する学生が増えた (Winterer 101; ルドルフ 130-32)。原書講読の授業は細々と続くものの、そこで培う読書体験は受講者の自己修養に結びつかず、彼らの知識自慢の道具へと矮小化されていった。

古典に人格形成の機能を見出さない学生が増えたことに対し、エリオットは危機感をあらわにした。彼の不安は、知性と徳性を兼ね備えた教養人を大学が育成できていないことにあった。1903年の全米教育協会でエリオットは、学問領域が広がり、人々の共通知となるものが減ることで相対的に古典の価値が下がった時代であるからこそ、前世紀に培われていた道徳を回復させようと聴衆に訴えた (Eliot 25)。果たして、古典教養主義離れがすすむポストベラム期のアメリカにおいて、人々が自己研鑽する術はなにか、次節以降、オルコットの短篇をとおして具体的に検証していく。

## 2

「小さな近所さん」(“Little Neighbors” 1874) は、20年前に愛娘を失ってから、独り読書することで時間を費やすしかなかった教授が、近所の少年と鳥の言語を一緒に学ぶことで他者と交流するという物語である。作品冒頭、プラトンの『国家』を読んでいた古典学者と思しき教授は、少年との出会いを境に、古典書を粗雑に扱い始める。たとえば彼は、古典語の辞書の上に少年を座らせ、蔵書で少年の家を作る。教授にとって古典書は、読物ではなく少年とのコミュニケーションツールに、その役割を変えている。このような古典に対する教授の意識変化は、彼がアメリカの画家で鳥類研究家のジョン・ジェームズ・オーデュボン (John James Audubon, 1785-1851) の本の挿絵を手持ちの古典書に貼りつける場面でさらに顕著となる。19世紀のアメリカで流行したスクラップブック制作について研究するエレン・グルーバー・ガーヴィー (Ellen Gruber Garvey) によれば、手持ちの出版物、たとえば教科書や官報、小説、説教集をスクラップの台紙にすることは日常的に行われていた (52-57)。教授も同様に、手持ちの古典書を台紙に転用していたわけである。

教授のスクラップブックには、死語 (dead language) すなわち古典語があらかじめ印字されている。今や誰にも使われず、新語ができたり文法構造が変わったりする可能性のない、変化の起こりえない言葉は、オーデュボンの鳥の挿絵で覆われることで存在をかき消されてしまう。ところが興味深いことに、文字にイメージが付与されることでスクラップブックから鳥の声が響き渡り、花が咲き始める (“Little Neighbors” 134)。

静止したテキストから音が聞こえるというこの場面は、文字（literary）から声（orality）へという本作の基本的な流れを映し出すものであろう。それは教授の読書習慣が黙読（視覚優位）から音読（聴覚優位）へ変化した点も見出すことができる。この音読は、基礎単語も頻繁に言い間違える少年の識字能力の低さもあって教授が始めたものだと考えられる。単独で書物に向き合っていた教授が、聞き手の存在を強く意識させる読み聞かせを始めた点からは、古典語の意味を読み解く孤独な自己修養モデルから、言語を他者との交流の手段とする人間のモデルへの転換が読み取れる。

### 3

「壁の穴」（“A Hole in the Wall” 1883）は、ローマの詩人オウディウス（Ovid, 43 BC-AD 17 or 18）の作品「ピュラムスとティスベ」（“Pyramus and Thisbe” 8）を種本として作られたシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の喜劇『夏の夜の夢』（*A Midsummer Night's Dream* 1605）をさらに書き換えた作品である。壁一枚で仕切られた家屋に住む男女が、壁の隙間越しに会話を始め恋に落ちるものの、両親の反対にあい非業の死を遂げるという原作とは違い、「壁の穴」のアメリカ人少年とイタリア人少女は、斧で壁に穴を開け交流を始める。その様子を知った少女の父親は、『夏の夜の夢』で石壁を演じるスナウト（Snout）の口上を述べながら、自宅を外界から遮断するためみずから設けた高い壁に、子どもたちが自由に行き来できる扉を備え付ける。

旧世界との壁に穴を穿ち、コミュニケーションの回路が開かれることで、新たなコミュニティが出現する。そのきっかけは、人々に消費され少年が街中で拾った本や新聞や広告などの印刷物にあった。たとえば、モンテ・クリスト伯の劇場ポスターは、少年の手によって凧となり、壁の向こう側へ飛ばされ、少女の手に届く。その凧は、見たり貼ったりするものから飛ぶものに変わることで、障壁を隔てた二軒の家の少年少女を出会わせる。

少年が手にする印刷物は隣家との垣根を取り払っただけではなく、近隣住民を巻き込む形でコミュニティを形成していく。たとえば、少年が手にした大判ポスターは、近所の外壁に貼られることで屋外展覧会に、古書は自作のスクラップブックとともに私設図書館の所蔵図書となる。ゴミをよすがに彼は街中の娯楽に触れ、近隣住民と会話を楽しみ、街の情報を交換し、美術館の入館料や図書館の会費が払えない街の浮浪児たちにその余韻を味わわせている。

このように、本作において街中で消費された屑は、少年に拾われることでコミュニケーションの道具となり、コミュニティを創設する契機となる。印刷物の氾濫を利用してコミュニケーションの可能性をどこまでも広げていく少年の姿は、先行作品やそのイメージが大量生産・大量消費される時代において、アダプテーションの知というものが新しい教養となり得ることを示している。

## おわりに

本発表では、オルコットの短篇を通して、アメリカ社会における新たな教養について考察してきた。彼女はまず、書物に向き合う孤独な自己修養から、言葉を使って外部の世界とつながりを求める新たな自己修養のあり方を提示していた。さらにオルコットは、先行テキストを換骨奪胎し、自らの創作物を新たに作り出していく知恵が、消費文化のすすむアメリカ社会における教養たり得るものであるということも伝えていた。ヨーロッパの伝統が底流にあることを意識しつつ、そのようなヨーロッパとの伝統と新たな繋がりを模索する知がそこでは重視されている。このような肩拾いのモチーフは、アメリカ文学の独立というテーマを考える際に重要な位置を占めるものであるように思われる。

## 参考文献

- Alcott, Louisa May. "Little Neighbors." *Aunt Jo's Scrap-Bag: My Girls, etc.* Vol. 4. 1877. Boston: Little, Brown, 1899. 116-43.
- . "A Hole in the Wall." *Lulu's Library*. Vol. 1. Boston: Roberts Brothers, 1890: 172-215. Rep. of "Little Pyramus and Thisbe." *St. Nicholas* Sept. 1883: 803-07.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 2nd ed. New York: Verso, 2006. (ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや訳、書籍工房葉山、2011年)
- Carnochan, W. B. *The Battleground of the Curriculum*. Stanford UP, 1993. (W・B・カーノカン『カリキュラム論争——アメリカ一般教育の歴史』丹治めぐみ訳、玉川大学出版部、1996年)
- DeForest, John William. "The Great American Novel." *The Nation* 6 (1868) : 27-29.
- Eliot, Charles W. "A New Definition of the Cultivated Man." Eliot, Charles W., and Andrew F. West. *Present College Questions: Six Papers Read before the National Educational Association, at the Sessions Held in Boston, July 6 and 7, 1903*. New York: D. Appleton, 1903.
- Garvey, Ellen Gruber. *Writing with Scissors: American Scrapbooks from the Civil War to the Harlem Renaissance*. Oxford: Oxford UP, 2013.
- Geiger, Roger L. "The Era of Multipurpose Colleges in American Higher Education, 1850-1890." Geiger, Roger L., ed. *The American College in the Nineteenth Century*. Nashville: Vanderbilt UP, 2000. 127-52.
- Morison, Samuel Eliot. *Three Centuries of Harvard, 1636-1936*. Cambridge: Belknap of Harvard UP, 1936.
- Rudolph, Frederick. *The American College and University: A History*. 1962. Athens: U of Georgia P, 1990. (フレデリック・ルドルフ『アメリカ大学史』阿部美哉・阿部温子訳、玉川大学出版部、2003年)
- Winterer, Caroline. *The Culture of Classicism: Ancient Greece and Rome in American Intellectual Life 1780-1910*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2002.

## *Philadelphia Fire* にみる *The Tempest* の翻案と

### 黒人男性であることの困難

山内 玲

「アメリカ文学の独立」というテーマは、建国期から19世紀中盤までのニューイングランドを中心として、アメリカ合衆国の旧宗主国たるイギリスへの文化的な対抗意識に由来するものであろうが、そのような枠組みのもとでアフリカ系の文学はいかなる位置づけにおいて語ることができるであろうか。アフリカ系アメリカ人作家 John Edgar Wideman は、イギリス文学のキャンオンたる William Shakespeare の戯曲 *The Tempest* (以下『あらし』と表記) の翻案を黒人の児童に演じさせるというエピソードを中核に据えた代表作 *Philadelphia Fire* (1990) において、主人公 Cudjoe に現代のインディペンデンス・スクエアにおいてその都市の過去の歴史を幻視として追体験させ、1805年のイギリスの圧制からの解放を祝う式典に黒人奴隷が強制的に駆り出される様子を描き出す。こうした場面から引き出されるのは、果たして「独立」という事象が、アフリカ系アメリカ人の観点から見て、無条件に言祝がれたり声高に唱えられたりするような事象であったか、という問いである。

こうした問題意識の下、発題者は議論の視野を20世紀の文学にまで広げ、旧宗主国文化に対する意識がアフリカ系アメリカ人の作品ではどう変奏されるのか、という問いを設定し、『あらし』の翻案の二つの系譜について概観した上で、*Philadelphia Fire* の翻案にみられる黒人男性の問題を論じた。具体的には以下の三点を検討した。初めに、20世紀の『あらし』の合衆国文学への翻案が、19世紀の旧宗主国に対する対抗意識ではなく、イギリスの文学的遺産を変奏しアメリカ文学の伝統に据えるプロセスを確認した。次にそうした文化的領有の歴史と軌を一にしながらも、アフリカ系アメリカ人作家による『あらし』の翻案がいかにカリブ海の反植民地主義運動の展開を経てなされたのか、という点を明らかにした。そうした翻案の歴史にワイドマンの作品を位置づけた後、最後に *Philadelphia Fire* における『あらし』の翻案について小説の展開と手法という見地から検討した。

#### 1. 『あらし』の翻案とアメリカ合衆国文学のキャンオン

『あらし』の合衆国文学への翻案は、地中海にあると想定されていた舞台となる孤島を新大陸と読み替えることから始まった。Alden T. Vaughan and Virginia Mason Vaughan によれば、こうした解釈が盛んになり出したのは19世紀初頭以降のことで、新大陸のイメージを戯曲に見出す研究が出てきた。さらにこうした見解の下、もともと島に住んでいたキャリバンを先住民、プロスペロを植民者の暗喩とする解釈がシェイクスピア研究において現れたのは19世紀も末のことであった。

こうした解釈の歴史が『あらし』をアメリカ合衆国の文学の系譜に位置づけようとする20世紀の批評家の想像力の素地となったのは疑うべくもない。こうした解釈の嚆矢となったのはD.H. Lawrenceの*Studies in Classic American Literature* (1923)であるが、キャリバンのセリフを引き合いに出しながら、逃亡奴隷が主人から逃れて手に入れた自由にその特質を見出している。Leo Marxは、*Machine in the Garden* (1962)において理想としての田園というアメリカ文学のモチーフの系譜に『あらし』を据え、プロスペロに一方で自然と格闘し、他方でヨーロッパ文明の腐敗と戦う植民者の姿を見出し、腐敗した社会からの避難所としての自然の重層性の象徴としてキャリバンの野性を読み解いた。自然児キャリバンという解釈の根底には先住民の姿を重ね合わせる認識があるが、そうした認識をより先鋭化し、他の非白人にまで拡大解釈を行ったのが、Leslie Fiedlerのシェイクスピア論であった。フィードラーは*The Return of the Vanishing American* (1968)において、キャリバンという名前が食人種すなわちcannibalに由来するという解釈を取り上げ、ヨーロッパの植民開拓時代において先住民が食人種と同一視されていたことを理由に挙げ、インディアンの象徴としてのキャリバン像を提示した。キャリバンという一登場人物の劣情を、抑制のきかない非白人の性欲の象徴として解釈しながらシェイクスピアの差別意識を批判するフィードラーは、さらに*Strangers in Shakespeare* (1972)において、アメリカ文化における性欲旺盛な黒人男性というステレオタイプの起源をキャリバンに見出した。このようにして『あらし』は、白人中心のアメリカ文学史の正典の枠組みにおいて、アメリカ合衆国の起源を具現する象徴として遡及的に言及されてきたのであった。

## 2. カリブ海の『あらし』の翻案を経由するアフリカ系アメリカ人作家のキャリバン像

性欲旺盛な黒人男性という典型的イメージの象徴というキャリバンの解釈に対し、ワイドマンも含めたアフリカ系アメリカ人男性の作家は意識的にならざるを得なかったはずである。だが、彼らがキャリバンに見出そうとしたのは、カリブ海諸島の反植民地主義運動において展開した『あらし』の翻案に見られる、主人に抵抗する反逆者の姿勢であり、そこに白人に抵抗する黒人の姿を重ね合わせようとしたのであった。しかしながら、男性性の問題はカリブ海における『あらし』の翻案をアフリカ系アメリカ人の男性作家が換骨奪胎する前に内在していた問題であった。Rob Nixonは、カリブ海諸島の反植民地抵抗言説におけるアイコンであったキャリバンが70年代初頭にその効力を失ったと議論を締めくくるにあたり、キャリバンの英雄の役割を担いするのが男性だけでなく、女性の活躍する場を見出せない点に限界があったと指摘する。

こうした問題は、アフリカ系アメリカ人の男性知識人による『あらし』の翻案において男性性の抹消という形を取った。Houston Bakerは*Modernism and Harlem Renaissance* (1987)において、ポストコロニアル批評でよく参照される有名なキャリバンの言語習得についての一節を引きながら、アフリカ系アメリカ人の知識人が示すジレンマと戦略をキャリバンが具現するという論を展開した。ベイカーによれば、主人であった白人の言語を強いられ、その言語を習得する過程でその価値体系に則って言語を使用することで黒人は白人社会に適應するものの自己卑下あるいは自己否定に陥らざるを得ないが、その価値体系に逆らって抗議の声を上げることで不協和音をもたらすことを白人の支配する社会において学んだ形式を歪めるという戦略として位置付け、そう

した戦略を支える基盤をアフリカ系アメリカ人の過去に由来する文化に見出しうる。ベイカーは James Baldwin のキャリバンに関する言及を引きながら以上の主張を述べるのだが、こうした男性作家の脱ジェンダー化を批判するのが Elaine Showalter である。ショールターはアメリカ文学におけるミランダの翻案の系譜について議論する際にベイカーの議論を引きながらキャリバンを被支配者即ち黒人すべての代表者として “everyman” “spokesperson” といった言葉で中性化することの問題点を指摘している。この問題は、『あらし』の具体的なエピソードの意図的な忘却あるいは無視として考えることができる。キャリバンに言葉を教えたのはその主人の娘ミランダであり、その言葉を覚えた後に劣情を抱いて彼女に襲いかかろうとしているのである。ポールドウィン並びにベイカーら男性の文学者がアフリカ系アメリカ人の苦難をキャリバンに重ね合わせる際に曖昧にしていたのがほかならぬこの劣情の問題であり、フィードラーがキャリバンに結びつけた性欲旺盛な黒人男性というステレオタイプを呼び起こしてしまうという問題であったと言える。

### 3. *Philadelphia Fire* における『あらし』の翻案と「失敗」

以上の白人中心の正典的なアメリカ文学の枠組みにおける『あらし』翻案と、抵抗者キャリバンの脱性化という形を取るアフリカ系アメリカ文学の翻案が展開された後、ワイドマンは *Philadelphia Fire* を執筆し発表した。3部構成を取る本作で描かれるのは、ミランダを襲うキャリバンの性欲が具現してしまう黒人男性のステレオタイプのスティグマを、現実に欲望として具現してしまう黒人男性作家クジョーである。第1部で1985年に MOVE というアフリカ系アメリカ人の宗教団体が生活していた共同体の地域に、市の警察が爆撃した実際の事件に材を取り、その事件について本を書くために調査し、生き残りの少年の追跡にこだわる作家クジョーの姿が、別れた妻とその子供たち、そして友人の娘に劣情を催す姿などを交えながら描かれている。第2部は1960年代後半に遡り、文化事業の一環として黒人の少年少女が『あらし』を上演するのに際し、クジョーがカリブ海の『あらし』の翻案を踏まえた演出の指導を行うというエピソードが描かれるが、そうしたエピソードが断続的に語られる中、作者ワイドマンが顔をだし、その断片的な創作メモや息子の投獄を中心として作者自身の実人生に対応する出来事の記述が混ざり合いながら進行する。第3部ではメタフィクショナルな装いは影をひそめ、JB というベトナム戦争帰りのルンペンの黒人男性が宗教団体 MOVE の教主の本を書き直すという体裁を取りながら、社会の底辺からフィラデルフィアの光景と都市の諸問題が描かれる。最後にクジョーがインディペンデンス・スクエアで開催される MOVE の事件の記念式典に参加する場面で幕を閉じる。

本シンポジウムでは、第2部の『あらし』の翻案劇を巡るエピソードに議論を絞り、アフリカ系アメリカ人の象徴として読み替えられた抵抗者キャリバンというイメージの陰に消し去られた男性性問題を、ワイドマンがいかに取り組んだのかという見地から作品を考察した。その際着目したのが、ミランダに対するキャリバンの劣情が作中の翻案劇でいかに解釈されたのかという問題である。ワイドマンは『あらし』におけるキャリバンに対する言語の教授とその後の劣情を巡る台詞を引用した後に、子供たちに対するクジョーの演出上の解説という体裁で、その台詞に対する解釈を展開する。クジョーはミランダの言葉を “spurned woman speech” (139) と評してあっさり一蹴されたと述べ、さらにまじめでお堅い女教師と嘲笑気味に語る。このクジョーの言葉

を引用しながら、Jonathan Goldberg は、教育による植民地化に対する拒絶として、言葉には肉で答えるというキャリバンの応答姿勢において、未遂に終わったレイブが正当化されているように思われると指摘しながら、そのあまりにも露骨な性差別の姿勢に疑念を呈している。挑発的な言辭を弄するミランダ解釈はあまりにも露悪的であるがゆえに植民地主義への批判言説の戦略性を感じさせる語りになっているとも思わせもするのだが、植民地主義批判の言説の援用において、その性差別が正当化されるわけではないといった誹りを免れることはできない。

一見単なる性欲旺盛な黒人男性というステレオタイプの再生産に過ぎないと思われるこの翻案劇の様子は、それを描く第2部に散見されるメタフィクショナルな要素に目を転じるならば、父の否認というテーマを隠し持つことがわかる。この見地から注目すべきは、クジョー扮するキャリバンが父親の存在が誰だか特定できないこと、さらにはその正体を知るのを嫌がっていることを述べる点にある。確かに『あらし』の戯曲において魔女シコラックスと悪魔の間に生まれた私生児とするくだりはあるが、そのつながりを否認するという記述はない。こうした改変は、小説の第2部が殺人罪で投獄されている息子との関係を逡巡するワイドマンの思考が断章の形で言及されており、さらには息子の物語を紡ぐことができないという逡巡をつづり、息子に手紙を送ろうとする記述で締めくくられているという構成を考えると重要な意義を持つ。ここに示される父と息子の断絶はアフリカ系アメリカ人の男性が父親をロールモデルにできないゆえに生じる問題であり、反植民地主義のアイコンと性欲旺盛な黒人男性というステレオタイプの象徴を前景化するキャリバンの描写に男性性の機能不全の問題が目立たぬように書き込まれていることこそが Philadelphia Fire における『あらし』の翻案の意義であるように思われる。

### 主要参考文献

- Baker, Houston A. *Modernism and the Harlem Renaissance*. 1987. Chicago: University of Chicago Press, 1989. Print.
- Fiedler, Leslie. *The Return of the Vanishing American*. New York: Stein and Day, 1968. Print.
- . *The Stranger in Shakespeare: Studies in the Archetypal Underworld of the Plays*. 1972. New York: Barnes & Noble Publishing, 2006. Print.
- Goldberg, Jonathan. *Tempest in the Caribbean*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2004. Print.
- Lawrence, D. H. "Final Version (1923)." Ezra Greenspan, Lindeth Vasey and John Worthen, ed. *Studies in Classic American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 7-161. Print.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. 1964. New York: Oxford UP, 2000. Print.
- Nixon, Rob. "Caribbean and African Appropriations of *The Tempest*." *Critical Inquiry* 13.3 (1987) : 557-578. Print.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan. 1999. London: The Arden Shakespeare, 2000. Print.
- Showalter, Elaine. *Sister's Choice: Tradition and Change in American Women's Writing*. 1991. New York: Oxford UP, 1994. Print.

Vaughan, Alden T. and Virginia Mason Vaughan. *Shakespeare's Caliban: A Cultural History*. 1991  
Cambridge: Cambridge UP, 1993. Print.

Wideman, John Edgar. *Philadelphia Fire*. 1990. New York: Houghton Mifflin Company, 2005. Print.



## 笑う歴史家—ワシントン・アーヴィングによる アメリカ文学はじまりの空騒ぎ

山口善成

### I. パブリシストとしてのアーヴィング

ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) は一般的に好古家、感傷家、世事に無頓着な旅するバachelorとして知られている。実際、その通りだったのだろうが、ただそれと同時に忘れてならないのは、彼がこれらの公的なイメージを巧みに操作するパブリシストでもあったことである。後年、彼は『アメリカ文学百科事典』(*The Cyclopaedia of American Literature*, 1855) における自身の項目について、よりジェフリー・クレヨンらしい放浪紳士のパブリック・イメージに合うよう記述を訂正させている。イギリスで海賊版を抑える著作権訴訟が起こった際には、金銭に執着する強欲なイメージが広まらないよう注意を払ったという。本報告は、彼の最初の単独著作『ニューヨーク史』(*A History of New York*, 1809) を再考する手がかりとして、このようなパブリシストとしてのアーヴィングに焦点を当てたい。もちろん、『ニューヨーク史』を出版するキャリア初期の段階では、まだ彼は作家としての名声を確立しておらず、操作しうる公的なイメージは出来上がっていない。しかし、そんな駆け出しの時期においても彼はセルフ・プロモーションに長けたパブリシストであり、パブリシティ戦略は彼の著作の主題でさえあった。本報告の目論見は、アーヴィングのパブリシティに対する執着に、「アメリカ文学」の成立事情を明らかにする糸口を見出すことである。

### II. 大声、饒舌、パブリシティ—『ニューヨーク史』におけるアメリカ像

アーヴィングの『ニューヨーク史』が異彩を放っているのは、そのきわめて特異な語り手の存在である。本書は今では読まれることはほぼないが、これを書いたとされるオランダ系入植者の末裔、ディードリッヒ・ニッカボッカーの名はニューヨークの代名詞として今なおよく知られている。言うなれば、その内容よりも語り手のほうが目立っている歴史書である。そもそも出版に際してアーヴィングとその一味が仕掛けた大がかりなでっち上げ宣伝は、失踪したニッカボッカーなる人物の公開捜査願いを新聞に掲載して人々の関心を引くことだった。内容そのものよりも、語り手を呼び物にしたパブリシティ戦略は、その後の本書の受容のあり方を運命づけていたかもしれない。そして、このような観点からあらためて内容について見てみると、実はこの本に登場する人物は皆どのような役回りであろうと、我先にと大きな声で自らの存在をアピールする人々であることに気づく。『ニューヨーク史』はそれ自体の広告戦略においてだけでなく、内容のレベ

ルにおいても、パブリシティがコンテンツに先行することを示唆しているのである。

いくつか具体例を挙げてみよう。まずはニューアムステルダムの人々、コネティカット・ヤンキーたちである。彼らはひたすらよくしゃべる、その多弁さによってニューアムステルダムの人々を苦しめる大変迷惑な隣人として描かれている。新聞、パンフレット、地区の寄り合い、議会の審議など、いかなる場合においても彼らは「思想もなければ内容もなく話す権利」を駆使し、それを「表現の自由」と呼んだという(494)。平たく言えば、確固とした中身もないのに、大声でよくしゃべる人たちである。さらにヤンキーの多弁と声の大きさはやがてニューアムステルダムの人々にも感染し、物語のクライマックスは騒々しくやかましい弁舌の応酬へと突き進んでゆく。

ニューアムステルダムの総督たちも、やはり声が大きく饒舌な人々である。とりわけトマス・ジェファソンのカリカチュアとして描かれるウィリアム・キーフトは大仰な表現を好み、「弁舌の勇猛さ」をあらゆる局面で発揮する人物とされる(515)。彼に続く総督、ピーター・スタイベサントも前任者と基本的には同じで、アーヴィングの『ニューヨーク史』の世界においては、大声、饒舌さ、誇張に満ちた大言壮語はアメリカ的スピーチの最たる特徴とされる。しかも、そのように大きな声で言葉多くして表明される弁舌に思想もなければ内容もないのである。キーフトの時代からスタイベサントの治世にかけて重用され、ニューアムステルダムの守護神たる活躍をした軍楽隊トランペッターが登場するが、どのようにそのような高い榮譽を獲得したのかという質問に対し、彼はこう答えている。「多くの偉大なる先人たちと同じく、ただ私のトランペットを響かせることによってでございます」(強調はアーヴィング; 570)。名声は確固としたコンテンツによるのではなく、それを求める声の大きさによって獲得されるのである。

もちろん、『ニューヨーク史』は冗談と風刺に満ちた戯文であり、そのすべてを額面通りに受け取ることはできない。しかし、この空っぽの饒舌は単なるあてこすりとどまらず、独立期のアメリカ社会を適切にとらえていたのではないだろうか。アーヴィングの時代のアメリカは国家として独立はしているものの、まだはっきりとしたアイデンティティを確立していない。のちにアーヴィング自身、『スケッチブック』(*The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.*, 1819-20)の中で度々言及しているように、アメリカはいまだ未熟で不定型な段階にあった。つまり、アメリカについて語りたくても語るべき何かはなかったわけだ。とすれば、声ばかり大きくて内容がない、というのはむしろ必然である。「アメリカ」にしろ、「アメリカ人」にしろ、いずれも初めから明確な定義や実績があったわけではない。『ニューヨーク史』をはじめとするアーヴィングの初期作品は、容れ物だけはあるものの、まだ社会としてはっきりとした実体のないアメリカが、いかにして自己を実現することができるのかを描いている。そして彼がおどけた書きぶりて提示する自己形成のあり方は、これまで見てきたように、何はなくとも大声で饒舌にセルフ・プロモーションすることだった。まずは大声で目立って存在を認めさせ、あとから実績を補う、という方法である。

『ニューヨーク史』出版時のペテンは、アーヴィング自身が身をもって、このようなパブリシティ先行のアイデンティティ形成を行った実践例である。宣伝の効果はねらい通りで、また著者の正体もすぐに明かされたので、アーヴィングの作家としての知名度や評判も高まったという。もちろん、結果的には内容が伴ってこそその評価だったことは間違いないが、まずは人々の注目を浴びなければ評価さえしてもらえない。そのような観点からすれば、確かな業績を積み上げてから満

を持して世に出るのではなく、実績はあいまいでも、自身を先行プロモーションしてゆくやり方にはそれ相応の理があったと言えるだろう。

### Ⅲ. はじまりのパフォーマンス

何もないにもかかわらず、あたかも何かあるようなふうを装うのは、あらゆる「はじまり」に伴うふるまいなのかもしれない。リン・ハントは、革命期の修辞法の特徴を、過去との断絶によってぽっかりとあいた空白を新しい言葉と象徴によって権威化し正統化する行為としている。それは国家としての正統性を保証するものが何らないにもかかわらず、あたかも常にすでに存在していたかのようにふるまうジェスチャーや言葉づかいである。クリストファー・ルービーの言葉を使えば、それは新しい始まりに付随する「なくてはならないフィクション」(“necessary fiction”)と言えるだろう。アーヴィングの『ニューヨーク史』が描くのは、そのような正統性と非正統性が共存するはじまりの風景なのである。

ではこのような、はじまりのパフォーマンスを通じて、どのような自己が形成されていったらうか。ここであらためて、『ニューヨーク史』の中で最も声大きくして自己アピールする人物、歴史家ディードリッヒ・ニッカボッカーに注目してみよう。彼は『ニューヨーク史』のほぼすべての章を、饒舌かつ感情的な前置きで始め、ニューアムステルダムの先祖たちに対する熱い思いを吐露している。しかし、実のところ、彼の関心は常に自分自身の名を立てることなのだ。自分という歴史家なくしては、ニューヨークの街そのものには意味がない、とさえ言って憚らない。

もちろん、ニッカボッカーが描くニューアムステルダムの人々と同様、歴史家自身の多弁と大声も、自分への注目を集めるという以外は実質に欠ける。それは彼が自らの饒舌が空っぽであることを暴露しているとおりでである。「書き手には権利がある。考えていることに加え、考えていないことをも言い、知っていることに加え、知らないことについても話し、あてずっぽうでものを言い、疑い、自らと口論し、読者とともに、また読者のことを笑い(後者について我々書き手は十中八九こっそりしている)、憶測に耽り、ダッシュやアスタリスクやその他多くの無邪気な道楽に手を染めることを。言うなれば、これらすべてが相まって書物の頁を埋め、また販売業者の懐と著者の飢えた腹を満たすのだ」(512)。あらゆる書物は意味のない言葉や記号の寄せ集めとし、その目的はいたづらに紙面を増やして儲けることだというわけだ。

空っぽな多弁を繰り返すことによって次第に浮かび上がってくるのは、やはり実質の伴わない名前だけのパブリック・イメージである。おしゃべりだが中身がなく、本歴史書の著者とされているが失踪後二度と姿を見せないため、その意味でも実体がない。ただ、おそらく中身がないからこそ、ニッカボッカーはあらゆる方法でニューヨークにタグ付けされ、その名は土地に不可分に結びつくのである。アーヴィングはこの後、ニッカボッカー的なペルソナをさらに洗練させ、旅するバチェラー、ジェフリー・クレヨンのパブリック・イメージを完成させる。クレヨンはニッカボッカーに比べて落ち着いた理性の人のように見えるが、一步引いて比較してみると、両者の効果はほぼ同じである。二人とも首尾一貫した人格や自律性を有する人物ではなく、いわば語りの「設定」なのである。とりわけクレヨンの「旅するバチェラー」の設定は、他の作家たちによって二次創作され、多くのクレヨンの語り手とテキストを生み出した。

興味深いことに、アーヴィングの英国最良な紳士気取りを強く批判していたジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper）でさえも、クレヨン型の語り手設定を用いて、架空の旅人によるアメリカ旅行記（*Notions of Americans, by a Traveling Bachelor*; 1828）を書いている。しかも、彼はそこでアーヴィングとは正反対に、ナショナリスティックなアメリカ擁護を展開するのだ。アーヴィングの発明した「旅するバachelor」の類型はさまざまなバリエーションを許容し、当初のあり方とはまったく別の思想的なメッセージをこめて転用することさえ可能だった。デイヴィッド・ダウリングはアーヴィングの功績を彼個人の authorship ではなく、彼とその仲間たちによって共有される共同の語り手像ないし作家像を作った点に見ている。たしかに、アーヴィングはその後のアメリカン・ルネサンスの作家たちに比べ、思想的な深みに欠ける。しかし、そもそも「アメリカ文学」というジャンルが成立していない中、いち早く一種のトレードマークとして機能しうる設定を構築したことは特筆に値すると言えるだろう。

『ニューヨーク史』のデードリッヒ・ニッカボッカーは、ジェフリー・クレヨンと比べるとまだ語り手の設定として完成されたものではない。しかし、ニッカボッカーの創造は、その後アーヴィングがアメリカの作家の共同アイデンティティを形成してゆくうえで重要な一歩であったことは間違いない。事実、1833年には雑誌『ニッカボッカー』（*The Knickerbocker*）が創刊され、ニッカボッカー風の語り手もジェフリー・クレヨン同様に再利用、二次創作されることになるのである。

#### IV. むすび

アーヴィングの『ニューヨーク史』に見られるはじまりの問題は、おそらく同時代の「アメリカ文学」が直面していたのと同じ問題である。そもそも「アメリカ文学」なるものは存在しなかったのだ。もし「アメリカ文学」をアピールするとしたら、それはかなり強引にアドバルーンを上げざるをえない。それはちょうど、『ニューヨーク史』というタイトルで「ニューヨーク」をお題に掲げつつ、しかし中身はニューアムステルダム時代をゆっくりと辿り、そうかと思いきや必ずしもオランダ植民地時代の史実に沿わずに意図的に過去と現在を混同して、最終的には「ニッカボッカー = ニューヨーク」の等式を成り立たせてプロモーション的には成功させてしまうような力業である。本報告は、「アメリカ文学」の成立を考える際に、思想、文化、政治的背景を考慮することに加え、当時の作家や出版業界によるパブリシティ戦略やセルフ・プロモーションの方法についてさらに考察する提案である。

#### 主要参考文献

- Dowling, David. *The Business of Literary Circles in Nineteenth-Century America*. New York: Palgrave Macmillan, 2011.
- Fliegelman, Jay. *Declaring Independence: Jefferson, Natural Language, & the Culture of Performance*. Stanford: Stanford University Press, 1993.
- Hunt, Lynn. *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*. Berkeley: University of California Press, 1984.

Irving, Washington. *History, Tales and Sketches*. New York: Library of America, 1983.

Jones, Bryan Jay. *Washington Irving: An American Original*. New York: Arcade Publishing, 2008.

Looby, Christopher. *Voicing America: Language, Literary Form, and the Origins of the United States*. Chicago: University of Chicago Press, 1996.

大宮健史著  
*Mark Twain and Europe*

重い中身の瀟洒な本

（大阪教育図書、2015年10月、417頁、本体6,500円＋税）

市川博彬

大宮健史の『マーク・トゥエインとヨーロッパ』は、2つの部分に分かれ、第1部はトゥエインとダーウィンおよび彼の思想との関係、第2部はトゥエインとイギリスの作家たちとの関係および彼のヨーロッパを舞台にした作品群について論じられている。本文295頁、これに文章を削って鋭利にした分だけ膨らんだ巻末の注と膨大な書誌一覧、索引の100頁余りを加えて総計417頁。全文英語で書かれ、瀟洒な外観に重い中身の詰まった研究書になっている。

本論に先立つ序論には、全体の見通しがつけてあり、ありがたい。トゥエインをアメリカから離してヨーロッパの文化と伝統の中に置くことで見えてくるもの、それはじつはトゥエイン自身がダーウィンをはじめフロイト、スティーヴンソン、アーノルドら直接会った同時代のヨーロッパの巨人たちから直接間接に得たものと重なっている。端的に言って、人間の存在はもって生まれた遺伝的性質と周囲の環境によって決定され、神の意志でも人間の自由意思によるものでもない。これが、ダーウィンを知ってトゥエインの中に澱のように沈澱して行ったもの、大宮が *Darwin's teaching* と呼んでいるものの中身だろう。

第1部はトゥエインとダーウィンの出会いから始まり（1章）、以下ダーウィンから「学んだ」ことを、作品の中で検証していく。2章『間抜けのウィルソンの悲劇』（1898）、3章『ハドリバークを墮落させた男』（1900）、4章いくつかの短編：「我が人生の岐路」（1910）「おれたちの考え」（1902?）「犠牲者」（early 1900s?）、5章『人間とは何か?』（1906）、6章『細菌の間で暮らして3000年』（1905）。

ダーウィンから得たものを大宮が“teaching”と呼んでいるのは気になるところだが、「適者生存」「弱肉強食」といった、ダーウィン自身を離れて流通したものとは無縁であり、むしろそれらを否定するものであることは、大宮が念を押して詳述しているところである。また、moralもまた進化するとするダーウィンに対し、トゥエインが独特のレトリックでそれを否定し、人間は倫理的、道徳的に最低の生き物だと言っていることも付け加えている。

人間のモラルの退廃についてさらに1点付け加えると、3章『ハドリバーク』論の結論で、トゥエインがハドリバークの人々の道徳的退廃ぶりを暴きつつ決して絶望せず、笑劇に仕立てた、そこに人間に対する共感（compassion）を見る。大宮は compassion を『ハドリバーク』の文脈を離れたところから見つけて来ていて、それは決してほめられたことではないのだが、大きな救いになっていることには間違いない。

ダーウィンの影は第2部に入ると消える。代わって登場するのが、ステイーヴンソン、アーノルドの二人の同時代のイギリス人文人。『ジキルとハイド』の作者である前者からは、二重（多重）人格にまつわる議論、さらにフロイトにつながる議論が展開される（7章）。ただしフロイトの『夢判断』（1900）と1897年から1908年の間に執筆された『44号、不思議な少年』との間に直接の関係はないとみてよいだろう。つづいて8章で取り上げられるマッシュー・アーノルドについては、このいかにも高等な教養人のアメリカ批判にトウェインが反駁する形で応じたのだが、大宮はそのことを『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』（1889）、『アメリカの爵位権主張者』（1892）の中で検証しようとしている。大胆な発想である。ついでイギリスの作家にあげられるのはシェイクスピア（9章）。前の二人のように同時代人とはいかないが、トウェインと関わりのあるイギリス人作家を挙げるなかでシェイクスピアは落とせないだろう。トウェインに限らず、だれにとっても関わりのある作家ではある。大宮が特にシェイクスピアを挙げたのは、トウェインが最晩年に『シェイクスピアは死んだか？』（1909）を書いたから。そこで彼が主張したかったのは、シェイクスピア＝バーコン説の蒸し返しではなく、かつて「おれたちの考え」（1902?）『人間とは何か？』（1906）で主張した決定論の再確認だった。晩年つづいた金銭的な問題、妻と娘の死という不幸を、こうなるしかなかったのだという決定論で耐えるしかなかったのではないか、というのが大宮の結論である。

残った10章と11章は『コネチカット・ヤンキー』と『地中海遊覧記』（1869）にあてられる。両書とも長大な作品で、いかに大宮とて全体を取りあげて検討するわけにはいかない。たえず全体への気配りはしつつも、『コネチカット・ヤンキー』で注目するのが、“white Indians,” “Comanches,” “squaw[s]”といったことばが使われていること、そのわずかなことばを手掛かりにして、支配者と被支配者の構図を読みとる大宮の力技には感心させられる。彼によれば『コネチカット・ヤンキー』は、より広いアメリカの歴史の文脈におけば、植民地を建設しようとするコロンブスとアメリカ原住民の物語である。『遊覧記』においても相似のことはいえて、ヨーロッパ文明国を遊覧中の前半と中東の聖地に入ってから後半とでは、アメリカ人観光客の立つ位置が逆転する。ヨーロッパにあるときはアメリカ人は元気のいい野人だが、中東の地に入ったとたん、野蛮なのは現地の人で彼らはインディアンにたとえられ、アメリカ人は西部の荒野に行く旅人にたとえられる——しかしながら、この『遊覧記』が『コネチカット・ヤンキー』と決定的に違う点がある。舞台はヨーロッパだが執筆された年代が違う。『遊覧記』の1869年はトウェインにとってもっとも初期の出版であるのに対し、他のこれまで大宮の俎上に載ったほとんどすべての作品が晩年、最晩年、さらに死後出版の作品である。大宮がこの点に触れなかったのは、『遊覧記』に晩年のペシミズムを感じなかったからだろうか。

以上1章から11章まで、ほんのひとかけらずつつまんでメモに残し、書評とした。穴のあいたざるで水を掬うような紹介しかできなかった。大宮が本書で扱った作品は、トウェインのものに限らずじつに多数、広範囲に及んでいる。めったに読まれることのない、手に入りにくい、貴重なものもあるだろう。書誌一覧、索引を頼りに探すしかない。

またトウェインには彼自身が書いたメモ、日記、手紙の膨大な資料が残っており、このほうは幸い活字になったり、ウェブ上で公開されたりしている。大宮は貴重な資料に加えて、これら

森 瑞 樹

生の資料をたんねんに読んで作品解釈の資料に使っている。書評を書くときそれら大宮の使った資料に当たり直すのも、これはこれで有意義な作業だった。一つお願いがある。手紙からの引用には、誰に宛てていつ出した手紙なのか、最小限の情報を出しておいてほしい。手紙の性質上、宛名と日付がわからないと、読んでも意味が通じないからである。

最後に、書評の範囲を超えていることを承知の上で、大宮さんに注文。トウエインの後期に属する作品で、ヨーロッパが舞台の大作、*Personal Recollections of Joan of Arc* (1896) について、ぜひ論じてください。

(March 2017)

渡邊克昭 著

『楽園に死す—アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』

(大阪大学出版会、2016年1月、xiii+494頁+52、本体7,100+税)

森 瑞 樹

死者を模するかのように横たわり、死とは何かという見果てぬ深淵への滑落に身を委ねる。振り払おうとも寄り添い離れない意識に阻碍されると同時に、その底には漸近することもできず、そこは常に既に決して生者の手には届かない地平へと後ずさって行く。それでもなお、死とは何かを知り、死を横断する秘技を探し求めたいという奇妙な衝動に駆られずにはいられない。誰しもが断続的に不意におこなうであろうこのようなある種儀式めいた瞑想へ、本書はアメリカ文学研究の視座から一条の光を与えてくれる。

本書では、生命の終焉としての死とは位相を異にする〈死〉、すなわち主体的に生きて経験することも措定することも能わない表象不可能な死が必然的に孕む〈死〉のアポリアを主旋律として、また時に通奏低音として、主としてポストモダン小説が精緻に、且つ大胆に読み込まれてゆく。そして、本書の研究書としての魅力を更に増しているのは、〈死〉のアポリアと錬金術仕立ての「楽園」、つまり後期資本主義型のシミュラクルとしての重層的な「〈不死〉のアメリカ神話」とを接合させている点にある。〈不死〉の楽園アメリカにおいて、ポストモダン・アメリカの小説家達はいかようにアメリカ的想像力を発揮し、そこに取り憑いた〈死〉のアポリア、つまり「楽園に死す」という二重のアポリアのなかから、いかなるエクリチュールを紡ぎ出してきたのか、以下で本書において追求されるその軌跡を大掴ながら追っていくことにしよう。

はじめに、そしてデリダの郵便論等を援用することで続く各論の補助線を引くことになる序章、及び結論を除き、全5部21章から成る大著の幕を開ける第1部「喪服の似合うペロー」は、ソール・ペロー文学のテキストに偏在する生と死という弁証法的対立を喪という概念により脱臼させ、い



かに〈死〉と寄り添うのかという論旨のもとで展開される。『この日を握め』（1956）を読み解く第1章では、不定形的に己を偽る詐欺師タムキンに貨幣論的側面を読み込み、潰えることのない循環的な資本主義経済とは本質を異にする「死のエコノミー」において〈癒し〉と〈騙り〉というパルマコンとして機能する彼によって〈死〉のアポリアを与えられたウィルヘルムが、その出口のないアポリアに身を開いてゆく過程が焦点化される。第2章では、『サムラー氏の惑星』（1970）のサムラーが苛まれる二重の存在論的不安が前景化される。それゆえに彼岸と此岸の境界に宙吊りにされるサムラーは、進歩主義的アメリカにおいて彼の言辭がデッド・レターとして陥る郵便論的不安に満ちた〈死〉の空間での身振りを垣間見せてくれる。『フンボルトの贈り物』（1975）を扱う第3章では、ペロー文学に顕著なアポリアを孕む贈与がもたらす〈死〉の贈与が、生死と時空を隔て、アメリカ資本主義の消費の対象としてあった文学者フンボルトとシトリンとの差延に満ちた交感を逆説的に可能にし、贈与が交換に回収されてしまうアメリカ的システムを内破させる契機を幻視させる。第4章では、『学生部長の12月』（1982）を喪のエクリチュールとして捉える。それぞれ女性の影を残す3つの空間に身を置くことで主人公コルドのパリンプセスト的に重ね書きされた身体は、喪の作業でもある死のリハーサルを通じて、遥かブカレストから無秩序な牢獄としてのシカゴ、すなわち彼自身の内なる牢獄に絡め取られていた自己をそこから解放し、通訳不可能な〈死〉のアポリアへと反復的に彼を誘う。この第1部を通して、ペローの文学的レトリック、つまりアポリアでの宙吊りという文学的想像力と、登場人物が多層なテキスト空間のなかに幽閉され宙吊りにされるメタフィクションの技法との共振性が自ずと浮き彫りにされ、次部へと架橋してゆく様は圧巻である。

第2部「メタフィクショナルな「亡霊」の旅——バース、パワーズ、エリクソン」では、副題に名を連ねる3作家のメタフィクションから生じる亡霊という視座から、「樂園に死す」というアポリアの変奏のプロセスへの考察とそれと結びつくテキスト成立過程への考察を基軸に、メタフィクションのテキスト空間が大文字の歴史を脱構築する郵便空間となっていることを「旅」のメタファーを手掛かりにして突き詰めてゆく。ジョン・バースの『旅路の果て』（1958）を主として扱う第5章は、テキスト空間に幽閉されたメタフィクションの主人公であり、それゆえに固有の死を奪われるという〈死〉のアポリアに逢着するジェイクの軌跡を辿り、短編集『びっくりハウスの迷い子』を読む第6章へと道を譲る。この章においては、幾重にも重なる〈不死〉の迷宮＝メタ物語空間で反復的に蘇る〈不死〉の亡霊の互いに間テキスト的に共鳴する旅に焦点が当てられる。第7章では、リチャード・パワーズの『舞踏会へ向かう3人の農夫』（1985）を駆動させる写真という複製された亡霊を生むメディアに焦点を当て、鑑賞者が写真に自らの痕跡を上書きすると同時に、自己/自伝をも書き換え差延を生む過程に内破的衝動を見出す。パワーズの『囚人のジレンマ』を扱う第8章で焦点化されるのは、進歩と完璧さを標榜するアメリカの第二次世界大戦と冷戦期の囚人のジレンマ的記憶を書き換え可能なものとして提示する過程である。第9章では、スティーヴ・エリクソンの『黒い時計の旅』（1989）は、メタフィクショナルな亡霊に取り憑かれた並行世界への〈死〉の旅の物語を浮き彫りにしてゆく。

第3部「デリーロと「スペクタクルの日常」」は、広告という郵便空間を形成するもうひとつのメディアへのテーマ的跳躍を果たすと共に、ドン・デリーロ文学において追求される〈死〉、及び多様なメディアを取り巻く諸問題と「樂園に死す」というアポリアがいかに結びつくのかとい

う命題に挑む。第10章では『アメリカーナ』(1971)を取り上げ、消費文化と蜜月な関係を結ぶ「楽園アメリカ」において、「広告の詩学/死学」によって惹起される〈死〉のアポリアの諸相が克明になる。『ホワイト・ノイズ』(1985)でシミュラクルとしてのヒトラーが含み持つ流通商品としての無尽蔵な消費に着目する第11章においては、ポストモダン・アメリカが恐怖するノイズとしての〈死〉から「ホワイト・ノイズ」に変貌し、そこから〈死〉のアポリアが浮上する過程が、コマーシャル等の反復的な日常のスペクタクルとの関係から論じられる。第12章では、所謂アメリカの化身でありシミュラクルでもある JFK 暗殺という文化的メルクマールを克明に描く『リブラ』(1988)において、暗殺犯オズワルドが亡霊的シミュラクルをメディア的反復によって増殖させ、遂にはシミュラクルとして暗殺されるという逆転的な「撃つ/写す」<sup>シニエーション</sup>という力学が、歴史に回収されることないアウラをいかに生産するのかという論が展開される。『マオ II』(1991)を読む第13章は、テロリストと小説家の奇妙な照応関係に焦点を当て、ポストモダン・アメリカの消費文化における小説家ビルの〈死〉のアポリアへの応答から、そのアメリカで生産される物語としての未来への「対抗物語」<sup>カウンターナラティブ</sup>の可能性を追求してゆく。

前部においてなされたデリーロ文学の〈死〉への「詩学/死学」的洞察は、その章全てにおいて『アンダーワールド』(1997)を扱う第4部「逆光のアメリカン・サブライム」において更に発展させられ、「逆光のアメリカン・サブライム」、つまり冷戦の遺物が孕むダーク・サイドがメディアと共鳴することで上書きされる崇高な亡霊的形象を認識すると同時に、そこにおける表象不可能な崇高との対峙の仕方が可視化される。まず第14章においては、上記のテーマを探ることを起点に、冷戦時代の負の遺産をアートに変える3人のジャンク・アーティストの営為に着目し、そこで封じ込められる禍々しいアウラへの考察がなされる。第15章では、前部での「撃つ/写す」<sup>シニエーション</sup>という概念枠を呼び水に、アメリカにおいて銃に読み込まれてきた「即時/即時性」が、差異を孕んだ映像メディアとの反復的關係において亡霊化してゆく過程が解き明かされる。第16章においては、メモラビリアとしてのホームランボールとソ連の原爆との奇妙な重なりに着目し、ニックが追い求めるホームランボールに不可知の暗黒の力を感染させる表象不可能な「鬼」<sup>イット・フィギュール</sup>の比喩=形象を投影することで、それを「楽園アメリカ」に埋もれた亡霊を呼び起こす契機として読み込んでゆく。

第5部「〈死〉の時間、時間の〈死〉」においても引き続きデリーロ文学にフォーカスが当てられ、それらが描き出す〈死〉のアポリアと時間との関係が複眼的に論じられる。第17章で扱われる『ボディ・アーティスト』(2001)論において、身体性を限りなく削ぎ落とした零度の身体を獲得してゆく主人公は主体崩壊の危機に陥るものの、彼女の主体構築の反復的パフォーマンスは、逆説的に他者としての使者に自己を開示させる鍵として機能する過程が照射される。『コズモポリス』(2003)を読む第18章は、主人公のマンハッタン横断と「不可能な死」の横断とをパラレルに捉えることにより、有限性を突きつけられた、つまり〈死〉の時間を贈与された彼の身体と時間への考察を通じ、「アメリカン・サブライム」への応答が、ポスト9.11を思考するアメリカの想像力の糸口となることを論じ次章へと架橋する。9.11の再表象を巡る第19章では、『フォーリングマン』(2007)で描かれる永遠のタワーから飛び降り死へと滑落する「フォーリングマン」自体が、「楽園に死す」というアポリアのメタファーとして機能することが克明にされる。イラク戦争の果てに核の脅威を垣間見る主人公を描く『ポイント・オメガ』(2010)。それを扱う第20章では、惑星的な「深遠な時間」への思考へと人類を呼び戻す砂漠の想像力が、広大な時間的スケールを持つ

て人類の起源と終焉を幻視させると共に、人類進化の臨界点における逆説的な人類の滅亡というアポリアが、いかにアメリカ例外主義を把持し続けるアメリカの「死」のアポリアと共振するのかが問われる。終章は、短編「もの食わぬ人」(2011)を取り上げ、〈死〉のアポリアにおける宙吊り状態をシネマというメタファーが戦略的に且つ逆説的に利用することで立ち現れる深遠な時間相、つまり無限の生成の時間が開かれる瞬間を開示する。

以上のように、本書は「楽園に死す」というアメリカが孕む二重のアポリア一糸のみで、膨大なテキストをかくも強靱に且つしなやかに編み込んでいる。その中で展開されるアメリカ的想像力を巡る芳醇な思索は、映画や演劇等のその他多くのメディアへも敷衍しており、デリーロ研究者やポストモダン文学研究者のみならずとも、必ずや賞翫できることだろう。また、本書で展開するテキスト空間に佇む亡霊的残滓への応答とパレンプシスト的な痕跡の重ね書きという卓論は、著者渡邊克昭氏の当節から1980年代にまで遡る論考をひとつにまとめ上げるという労作にも重なるように思われる。本書にこのような読みを施してみるのもあながち酔狂とは言い切れないのかもしれない。

上岡 克己 編著

『世界を変えた森の思想家 一心にひびくソローの名言と生き方』

(研究社、2016年3月、xiii + 224頁、2,200円+税)

松 島 欣 哉

本書の著者である上岡克己氏には十指に余る著書・編著書があるが、単著としては、『『ウォールデン』研究 一全体的人間像を求めて』(旺史社、1993)、『森の生活 一簡素な生活・高き想い』(旺史社、1996)、『アメリカの国立公園 一自然保護運動と公園政策』(築地書館、2002)に続き、本書は4冊目の著書となる。

「まえがき」において上岡氏は、ソローの「人生を彩る名言・名文を選び、彼自身の言葉で生涯と思想を語らせようとする意図」(viii)で書いたと述べておられるが、本書は近年よく見られるソロー語録集とは大違いで、ソローと時代・地域を越えた作家・文化人・政治家との関係性を構築し、ソロー思想の現代的意義を明確に捉えた、上岡氏のソロー研究の集大成である。

本書の構成は、「まえがき」、「プロローグ」、5章からなるソローの言葉とその解説、「エピローグ」、「あとがき」、「コラム」およびソロー略年譜や参考文献等の資料からなる。以下、紹介文に類する内容にて書評の任を果したい。

本書には13篇のコラムが配置されているが、その役割について上岡氏は「まえがき」で、「現代的視点からソローを捉え直す試み」(viii)と述べておられる。たとえば、愛の詩人(!)と目されるインターネット上でのソローから(コラム1)、現代の環境文学へと発展するネイチャーラ

イティングのアメリカにおける創始者としてのソロー（コラム3）、自然と人間とを生命共同体と認識するソローと環境倫理学の父と目されるアルド・レオポルドとの関係性（コラム9）、アメリカの国立公園の父といわれるジョン・ミュアーに深い影響を与えたソロー（コラム10）、アメリカ最初の野生生物保護法の成立に尽力したセオドア・ローズベルトや「ウォールデンの森を護るプロジェクト」にも関係したクリントン夫妻等々、政治家への影響（コラム12）、殺虫剤や除草剤の生態系に及ぼす悪影響を告発した『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンやネヴァダ州の核実験場から飛散した死の灰を浴び乳癌になった女性たちの悲痛な叫びを含む『鳥と砂漠と湖と』の著者テリー・テンペスト・ウィリアムスの心の奥底に宿るソローの非暴力主義（コラム13）、等である。

「プロローグ」では、上岡氏はまずソローの生涯を略述し、禁慾主義者・自然保護論者・超越主義者・はたまたアナキストとまで様々に呼称されるソローを、環境的想像力を育んだ「森」とエコロジーと環境倫理に根ざした思想家とを合わせた「森の思想家」、と定義付ける（9）。

第1章のタイトルは「若きソロー」である。ここでは、大学生時代のエッセイ・『日記』・『書簡集』・『森の生活』・『コンコード川とメリマック川の一週間』からソローの言葉を抜粋し、そのあとに続く「解説」で、ソローにとってのコンコードという場所の重要性、モラトリウム宣言としての教師辞職事件、エマソンからの懲罰を受けて開始した日記の執筆、兄と争ったある女性を巡る恋愛事件（この事件は兄の死後、ソローに「罪悪感と自己嫌悪」（34）を残した）等に関して、詳細に説明される。

第2章のタイトルは「世界を変えた本『市民の反抗』」である。ここでは、『市民の反抗』・「マサチューセッツ州における奴隷制度」・「ジョン・ブラウン大尉を弁護して」・『日記』からソローの言葉を抜粋し、そのあとの「解説」で、ロバート・B・ダウズが『世界を変えた本』（1956）で取り上げた『市民の反抗』の成立事情と後世のガンジーやキング牧師に与えた影響、「弁護」に見られる暴力肯定の発言と『市民の反抗』で開陳される非暴力主義との関係等が説明される。後者については、一般読者のためにより詳しい解説があった方がよかったと思える。

第3章のタイトルは「人生を変えた本『森の生活』」である。ここでは、『日記』・「歩く（ウォーキング）」・『森の生活』からソローの言葉を抜粋し、そのあとの「解説」で、伐採されるマツやニレに対し痛みを共有する自然の権利の発想、「自然史に見られる客観的・科学的な事実」に哲学的・詩的な思索を織り交ぜた、人間と自然をめぐる新しい自然文学」（62）と定義されるネイチャーライティングの嚆矢としての『森の生活』の成立事情、ソローにとっての森での生活と『森の生活』の意義、さらに、1) 現代文明の問い直し、2) 生き方の問い直し、3) 「自然の権利」という新たな自然観、4) 真の豊かさを問う簡素な生活、5) 高さ思いを实践する精神生活の観点から、『森の生活』の現代的意義が論じられる。

第4章のタイトルは「緑のソロー（1）」である。ここでは、『日記』・『一週間』・「歩く」・『森の生活』・『メインの森』・「ハックルベリー」・『コッド岬』・「秋の色」・『月下の自然』・『書簡集』・「野生のリング」・「マサチューセッツの博物誌」・「森林樹の遷移」・大学生時代のエッセイから、命を育む自然やそれとは対照的に物質として厳然と存在する自然等の自然の多面性を示す抜粋、人間の活動によって失われゆく自然への哀惜を示す抜粋、自然の美と聖性を讃える抜粋、自然における生命の連鎖・ネットワークの存在を示す生態学的抜粋が記載される。「解説」はない。ただし、カーソ

ンとレオポルドに繋がる環境保護思想の展開やアメリカ・インディアンに対するソローの態度が、コラムで解説される。

第5章のタイトルは「緑のソロー（2）」である。ここでは、『森の生活』・『日記』・『メインの森』・『野生のリング』・『ハックルベリー』・『歩く』・『一週間』・『書簡集』から、ソローの自然保護思想を示す言葉を抜粋し、そのあとの「解説」で、「緑のソロー」として現代に蘇ったソローの思想が、1) 自然観察に基づく共同体意識、2) インディアンの存在、3) キリスト教への疑念、4) ウィルダネス（原生自然）の意義、5) 文学の脱人間中心主義（「文学の緑化」（172））、6) 清貧と高邁な精神生活の観点から論じられる。そのあとで、1970年になって『日記』から編纂された「ハックルベリー」を、「環境保護のマニフェスト」（174）とみる論考が続き、ソローの思想が「私（I）」から「共同体（WE）」へと発展して行ったことを解説する。さらに、彼の共同体意識は人間に留まらず、地球上の生命全体を共同体と見る現在の環境保護思想の原点となっていることを指摘する。

「エピソード」では、ウォールデンの森と湖を中心とする州立保護区が如何にして現在の自然環境保護運動の拠点となったかを解説する。

「あとがき」において上岡氏は、「これからの人生を変えたいと思っている人、新しい自分を見出したい人、生きた証を望む人」（202）にソローの言葉を贈る、と書いておられる。本書を手に取りソローをさらに深めようと思う読者のために、巻末には、ソローの著作集、主要邦訳文献、邦文参考文献、欧文参考文献が纏められている。

最近20年間のソロー研究書で個人によるものとしては、伊藤詔子氏の『よみがえるソロー — ネイチャーライティングとアメリカ社会』（柏書房、1998）、高橋勤氏の『コンコード・エレミヤ — ソローの時代のレトリック』（金星堂、2012）、小野和人氏の『生きている道 — ソローの非日常空間と宇宙』（金星堂、2015）が思い浮かぶ。これらはアメリカ文学の研究者を念頭に置いて書かれたものである。それに対し本書は、「一般読者を対象としたソロー案内書があまりにも少ないこと」（「はしがき」xiii）を念頭に置き、ソローが「絶滅危惧種」（同）にならないよう纏められたものである。

奇しくも、伊藤詔子氏が2017年1月から3月まで、NHK第二放送の「カルチャーラジオ 文学の世界」でソローを一般読者に講じておられた。テキストのタイトルは『はじめてのソロー 森に息づくメッセージ』である。伊藤氏のテキストも上岡氏の本書も、深い学識を一般読者に分かりやすく解説することに心を砕いておられることが読み取れる。一般読者やアメリカ文学を志す学生だけでなく研究者にも、本書を書架に家蔵されることをお勧めする。

竹内勝徳・高橋勤編

『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』

(彩流社、2016年3月、327+xiii頁、本体3800円+税)

栗原 武士

本書は、近年アカデミアで注目を集めつつあるアフェクト理論を議論のマトリクスとして、アメリカン・ルネサンス期の作家たちが身体と情動をどのように捉えていたかを詳細に掘り下げる、意欲的な論集である。簡単に本書の構成を説明しておく、全体が三部構成をなし、第一部は「解き放たれる身体」と題され、5編の論考が収められている。第一部の主題は、精神を身体に優越させる19世紀アメリカの精神至上主義のなかであって、作家たちがモノとしての身体をどのように認識していたかという身体論が中心となる。続く第二部である「知覚とリズム」に収録されている4編の論考は、言語がもつ、意味生成作用に完全に重なり合わない余剰ないし非言語的音声や身体的律動が、どのように人間の情動を喚起するのかを議論の中心に据えている。「情動の政治学」と題された第三部には4編が収められており、精神と身体という垂直的な対立構造を脱構築するような、人間の意識ではコントロールできないさまざまな情動を、当時の政治的状况をはからずも反映する文学的な装置として読み取る試みがなされている。

アフェクト理論になじみの薄い読者(恥ずかしながら評者もこのグループに含まれる)のために、本書は上記の三部構成ののち、スタンフォード大学のシアン・ンガイ氏による特別寄稿「トーン(抄訳)—『醜い感情』より」を収録している。この点、アフェクト理論という先進的な知見を文学研究に接続することで新たな作品分析・解釈につなげる試みを、できるだけ多くの読者・研究者と共有したいという本書執筆陣の強い意欲の表れであり、評者自身学ぶところが多かった。アフェクト理論(とその文学研究への応用)の概略については、ンガイ氏の論考および訳者である笠根唯氏による「訳者ノート」と合わせ、竹内勝徳氏による「まえがき」でも見取り図が示されており、アフェクト理論に初めて触れるという読者諸氏は、こちらも合わせて参考にされるとよいだろう。

「あとがき」で高橋勤氏は、アフェクトについて以下のように述べている。「アフェクトとは何か。大まかな定義をすれば、ひとつの刺激に対する神経生理学的な影響、その連鎖反応と言えらうか。それは人の意識や感情に先んじる無意識の反応であり、人間世界を超えて、世界にあまねく存在する連鎖の波であるとも言える。」つまりアフェクトとは、怒りや悲しみ、不安や幸福感といったさまざまな感情が、人間の知的な精神活動の結果としてではなく、モノとしての身体から生じる物質的反応という側面を有することを示す新たな概念であるといえる。感情に代表される人間の精神活動を物質化すること。モノとしての身体がどのように精神に作用するかを考えること。このことは19世紀アメリカ社会に広く膾炙していた精神至上主義に対し、ある種のノイズとして文学作品にその痕跡を残している。本書はテキスト言語、作品のフォーマット、作家の創作過程など、異なるレヴェルにおいて散見されるそのような痕跡を、丁寧に読み取っていく試み

であるといえよう。

そのような力作ぞろいの本書のなかでも、評者がもっとも興味をひかれたのは「情動の響き―[ブルックリンの渡しを渡る]にみるホイットマンの欲望」と題された舌津智之氏による論考である。本論考の土台をなすのは、「身体部位の生理学的反応が、主観的情感の生起に先行する」(126)と考えたウィリアム・ジェームズの抹消起源説を源流とする、情動の身体性をめぐるこれまでの議論である。「情動経験が中枢すなわち脳だけで生み出されることはあるにしても、それは相対的に稀少であり、大半の場合はある種の身体的変化およびその覚知を伴う」という遠藤利彦の言や、「精神の中でも身体の中でもなく、肉体的あるいは認知的な構成要素の内部では理解できないような集合体、ネットワーク、ないしはシステムのうち生起する」情動という、ジョナサン・フラットリーの定義などを援用しつつ、舌津氏は感情の身体性に着目するアフェクトの概説を本論の冒頭で示している。

そのうえで、本論はホイットマンの『草の葉』に反復される“ass”の音がサブリミナルに喚起するホモエロティックな聴覚的刺激を中心に、身体的な感覚が感情へと影響する様を説き明かす。音楽的なリフレインが「快」を繰り返し求める人間の根源的な欲望に結び付いているとすれば、このような反復に作家の肯定的な感情を映す言葉―例えば「歓喜」や「愉悦」などを重ねたくなるところだが、舌津氏は抑制的に“ass”が「生理反応のスイッチを入れる特権的な響き」だったと述べるに留まる。確かに意識に先立つものとしてのアフェクトの非言語的側面を考慮するならば、本作品における“ass”の反復は、フロイト的な抑圧の回帰とも、「快」を反復しようとする作家の欲望とも判然としない、無意識のあわいに漂う抑えがたい身体的な衝動として捉えるべきだろう。その意味で、アフェクトを探求する試みは、徹頭徹尾脱構築的なものにならざるを得ない。結びにおいて舌津氏は、「理性や思考とは別の回路に働きかける言葉の力」を捉えることが文学研究において必要であると述べ、イデオロギー批評や歴史批評の時代におけるアフェクト理論の新規性・重要性に言及している。情動の身体性についての考察とテキスト分析への応用、ならびにアフェクト理論を文学批評の社会的・歴史的文脈に位置づける舌津氏の試みは、本書のねらいをもっとも正確に反映した論考のひとつだといえるだろう。

以上、本書のねらいと中心的議論を概観してきた。本書を通読すれば、アフェクト理論と文学研究の様々な接合面を概観できるとともに、アメリカン・ルネサンス期の精神と身体をめぐるさまざまな言説に対して、作家たちがオルタナティブな視座をすでに提供していたことが理解できるだろう。本書をアフェクト理論そのものへの入門書としてみるならば、「本書では各論において、アフェクトをそのまま「情動」と言い換えたり、emotionを感情と翻訳したりしている」と竹内氏が「まえがき」で述べているように、「アフェクト」、「情動」、「感情」といったキーワードが、論によって異なる使われ方をしていることから、論考の意図がいくぶん分かりにくい箇所があることは事実である。また、論考によっては、内容的にアフェクト理論や情動というキーワードを用いることの必然性が見えづらいものもあるように思われる。この点、評者自身のアフェクト理論に関する知識不足ということもあるので、最終的には読者諸氏が実際に本書を手にとって判断していただければと思う。本書はしかし、身体と感情の結び付きに着目し、時代背景を考慮しつつテキストを丁寧に読み込むというコンセプトで全体的な統一が図られ、しっかりとした方向性の上にとまとめられた論集であるといえるだろう。

本書の提起する問題系は、精神・身体を一体としてその物質的側面に着目するという点において、デリダ以降の「言語からモノへ」という思潮のベクトルに沿っているだけでなく、昨今注目されつつある新しい唯物論の問題意識とも高い親和性を有する。また、高橋氏が自身の論考で述べているように、感傷小説研究とセンチメンタリズムをめぐるこれまでの議論にも、アフェクト理論は容易に接続されるように思われる。政治的な観点に目を向けるならば、市民個々の政治的判断という、一見理性が優越するように感じられる領域においても、感情とそれを誘引する遺伝的・身体的側面が重要な役割を担っているとするジョナサン・ハイトの『社会はなぜ左と右に分かれるのか』における議論なども、本書と同じ問題意識を共有するものだと考えられるだろう。ポピュリズムの旋風が吹き荒れる昨今の世界的な政治状況を理解するためにも、アフェクトというスコープが必要となるのかもしれない。その意味において、本書は領域横断的な人文学研究の動向を正しく捉えた先進的な研究成果であり、様々な示唆を読者にもたらしてくれるものといえる。

成田雅彦・西谷拓哉・高尾直知編著

『ホーソーンの文学的遺産—ロマンスと歴史の変貌』

(開文社、2016年5月、462頁、¥4,800)

高橋 愛

ナサニエル・ホーソーンは、『緋文字』(1850)で名声を得てから1864年に亡くなるまで、さらにそれ以降も、「文学的評価の浮沈という荒波」(iii)にのみ込まれることなく、アメリカを代表する作家としての地位を守り続けている稀有な存在である。本書は、そのようなホーソーンの没後150年を記念し日本ナサニエル・ホーソーン協会によって編まれた論文集である。編集者の一人である高尾直知氏が述べているように、本書では「百五十年のあいだに積みかさねられてきたホーソーン受容の思いもかけない諸相」(445)が示されており、この作家が遺したものの多彩さにあらためて目を見張らせられる。

以下簡単にではあるが、本書に収められた19本の論文を紹介したい。第I部「ホーソーンと十九世紀の作家たち」では、ホーソーンがうみ出した「ロマンス」の概念が再検討されたうえ、彼の文学が十九世紀の作家に及ぼした影響について論じられている。成田雅彦「ホーソーンとロマンスの遺産——「若いグッドマン・ブラウン」に見る現実の風景」では、ノヴェルと対置されたアメリカ文学を特権的地位に置くジャンルとしてではなく、具体的現実を解体することにより浮上してくる「異相の世界」(11)に迫る手法として「ロマンス」をとらえ、現実の深層から浮上してきた「異相の世界」を描いた例として「若いグッドマン・ブラウン」(1835)が取り上げられている。高尾直知「『モラル・ヒストリアン』ホーソーン——精神的歴史のロマンス的語りかた」では、その作品において過去の時代精神を描くとともに同時代のモラルも反映させてきた「モラル・



ヒストリアン」としてのホーソーンの遺産が、ハリエット・ビーチャー・ストウやルイザ・メイ・オルコットら十九世紀の女性作家に継承されているということが指摘される。西谷拓哉「メルヴィル「林檎材のテーブル」における家庭小説の実験——ジャンルとの親和と軋轢」では、同時代の作家の中でもとりわけホーソンからの影響を受けたハーマン・メルヴィルについて論じられている。西谷が目にするのは、彼らが交流していた時期に書かれた『白鯨』(1851)や『ピエール』(1852)といった長編ではなく、「林檎材のテーブル」(1856)などの短編小説である。ホーソン文学におけるディタッチメントや韜晦を手本としながら、メルヴィルは、借用をしていた家庭小説というジャンルを内部から切り崩そうとしていたという。吉田朱美「トマス・ハーディによる『緋文字』変奏曲」は、ホーソンが『緋文字』で提示した時代認識、女性像、語り的手法が、『ダーバヴィル家のテス』(1891)、『塔上の二人』(1882)、『日陰者ジュード』(1895)といったトマス・ハーディの作品に影響を及ぼしていると指摘している。竹井智子「“アメリカの小説”への挑戦——ヘンリー・ジェイムズ『象牙の塔』の終わりなき連関」では、未完の長編『象牙の塔』(1917)において、因果の連鎖というホーソン文学の遺産を人物や出来事の連関を描くことで追究しながら、ヘンリー・ジェイムズが独自のアメリカ小説を書き上げようとしていたと論じられる。

第Ⅱ部「ホーソンと二十世紀以降の作家たち」では、後代の作家に対してホーソンが与えた影響が論じられている。藤村希「ホーソンとフォークナーの「イタリア」——『大理石の牧神』と『響きと怒り』における南北戦争の影」では、『大理石の牧神』(1860)の舞台となるイタリアと『響きと怒り』の第2章で言及されるイタリアがともに南北戦争を暗示するもので、ホーソンもフォークナーも「イタリア」について語ることによって分裂した祖国の状況を描いているとしている。辻祥子「語り直される「痣」の物語——ホーソンからオーウェル、モリソン、ジュライへ」では、「痣」(1843)においてジョージアナの痣が象徴していたもの、すなわち、非白人性やセクシュアリティといった問題が、ジョージ・オーウェルの『ビルマの日々』(1934)、トニ・モリソンの『スーラ』(1973)やミランダ・ジュライの「あざ」(『いちばんここに似合う人』(2007)所収)にも投影されているとする。内田裕「ホーソン・ロマンスの継承——南部作家フラナリー・オコーナーによる受容」は、「ラパチーニの娘」(1844)の分析を通して語りの曖昧性が「ロマンス」の要素として機能していることを示したうえ、その特性がフラナリー・オコーナーに与えた影響を「善人はなかなかいない」(1955)の人物造形や登場人物が体験する啓示的な幻視に見ている。城戸光世「アダプテーションとしてのA——『緋文字』受容の変遷」では、『緋文字』のアダプテーションの歴史を概観するとともに、現代版アダプテーションの例としてスーザン＝ロリ・パークスの『血だまりのなかで』(1999)と『ファッキングA』(2000)やバーラティ・ムカジーの『世界の保持者』(1993)を取り上げ、『緋文字』が持つ文化的喚起力が指摘されている。伊藤詔子「アメリカン・ルネサンス的主人公の不滅——ファンション、デュパン、オースター」では、ポール・オースターがポーやホーソンらの生み出した登場人物の名や作家の足跡を混交させた『ニューヨーク三部作』(1987)をはじめとする作品で、「父なき世界との対峙、書くことの孤独と自我の迷宮」(236)というアメリカン・ルネサンスの作家たちの問題意識を語っていると指摘される。

第Ⅲ部「ホーソンと子どもたち」では彼の文学における子ども像や彼自身の子どものことについて論じられている。生田和也「パールと子ども像の変遷——失われた環を求めて」では、アメリカ文学における子ども像の変遷についての議論において等閑視されてきたホーソン作品の子ども

たちの中から『緋文字』のパールを取り上げ、無垢な存在として観念化されたロマン派の子ども像と実体を持つリアルな人間としての子ども像とをつなぐ役割を彼女が担っていると論じられている。高橋利明「ロマンスの磁場、奇跡、子ども——「雪人形」と『秘密の花園』の生命の庭」では、「雪人形」(1851)における庭、すなわち、子どもたちの想像力により「奇跡」が現出する空間が「ロマンス」の「中間領域」と重なるものであり、「奇跡」の現場としての庭はフランシス・ホジソン・バーネットの『秘密の花園』(1911)に受け継がれているということが指摘されている。稲富百合子「ローズ・ホーソン・ラスロップ——父の面影を求めて」では、長男ジュリアンや長女ユーナに比べると注目を集めることが少ない末娘ローズの生涯をたどりながら、創作活動ではなく、末期癌患者の看取りという慈善活動を通して彼女は父の意思を引き継いでいると論じられている。池松陽子「死者は語る——ジュリアン・ホーソンの「エドガー・アラン・ポーとの冒険」と「エセリンド・フィンガーラの墓」を読む」では、長男ジュリアンの著作のうち、死んでいるはずのエドガー・アラン・ポーとの遭遇という非現実的な出来事を語りつつ、同時代の伝記的資料以上にポーの実像に迫っているという「エドガー・アラン・ポーとの冒険」(1891)とヴァンパイア・ジャンルの先駆けと言える「エセリンド・フィンガーラの墓」(1887)が取り上げられている。池松によれば、この2作品を見るかぎり、ジュリアンは伝記作家として、あるいは、新ジャンルの開拓者として評価することができるという。

第四部「ホーソンと歴史・人種・環境」では、戦争、奴隷制、自然をホーソンがどのように語っているのかが再検討されている。野崎直之「「いつわりのアルカディア」——ホーソンの自然観を再考する」は、環境批評を背景にしながら、「運河船」と「わたしのナイアガラ探訪」という1832年に行った旅行についてのスケッチと『ブライズデイル・ロマンス』(1852)における自然表象に焦点を当て、ホーソンは、自然を文化的に構築されるものととらえると同時に、その外部に存在する物質性ともとらえていたとする。中村善雄「ホーソンの鉄道表象——「天国行き鉄道」を巡るピューリタンの／アフロ・アメリカンの想像力」は「天国行き鉄道」(1843)を取り上げ、鉄道に関する当時のイメージには逃亡奴隷支援の秘密組織である「地下鉄道」もあったこと、この短編の底本であるジョン・パニヤンの『天路歷程』(1678)で描かれる巡礼の旅が黒人霊歌やスレイヴ・ナラティヴにも転用されていることから、この作品には人種の言説が織り込まれていると論じている。進藤鈴子「ゴムの良心とリアリズム——政治家ホーソンがイギリスで見たもの」は、アメリカ領事として1853年から4年間イギリスに滞在していた際、クリミア戦争(1853-56)、リベリアの独立、本国の奴隷制、ハンガリー革命(1848-49)をはじめとするヨーロッパの独立革命等の問題についてのホーソンの認識を『イングリッシュ・ノートブック』に探っている。大野美砂「ホーソンの戦争批判——晩年の作品を中心に」は、エッセイ「主として戦争問題について」(1862)と「北部の志願兵」(1872)、さらに、未完のロマンス『セプティミアス・フェルトン』(1872)を取り上げ、歴史的に大義の下に暴力を肯定してきたアメリカをホーソンが批判していると論じている。古屋耕平「「頭を突き出した蛇のような疑念」——『セプティミアス・フェルトン』における歴史と情動」は、独立革命の聖地としてのコンコルドの歴史や南北戦争前にも続いていたという決闘の文化を背景に『セプティミアス・フェルトン』を読み解き、ホーソンが時代の支配的イデオロギーの影響を受けていない、正史には書かれていない歴史を描き出そうとしていたということを示している。

本書に収められた論文を概観しただけでも、ナサニエル・ホーソンという作家が時代や国境を越えて——国境という点には若干物足りなさはあるのだけれども——文学という営みに及ぼした影響力の大きさがあらためて実感させられる。さらに、時代や社会が激しく変化するなか見出されたホーソン文学の新たな側面を目の当たりにすることで、古典とされる作品を読む意味も再確認させられる。成田雅彦氏は、ホーソン文学が「単に異国風の海外文学ではありえず、この混迷の世界を生きていくうえでの「私たちの」遺産として読まれていく」(ix)と述べているが、これはホーソン以外の作品についても言えるはずである。本書は、ホーソン研究はもちろん、作家研究の可能性をひらくものとなっている。

藤江啓子 著

『資本主義から環境主義へ—アメリカ文学を中心として』

(英宝社、2016年8月、本体vi+218頁、価格2,200円+税)

藤 本 幸 伸

本書『資本主義から環境主義へ—アメリカ文学を中心として』は、『空間と時間のなかのメルヴィル—ポストコロニアルな視座から解明する彼の地球（惑星）のヴィジョン』（2012年）に継ぐ著者二冊目の単著である。資本主義という社会の仕組みは人々の社会生活や意識のあり方を大きく変えた。この変化がアメリカ文学のなかでどのように表現されているのかを概略的に論じていく第1章から第3章、19世紀アメリカ作家の個別作品のなかに資本主義とその社会に与えたインパクトを追っていく第4章から第6章、最後に、個別作家の自然との関わりを取り上げ、そこに今日的な環境主義の関心の質を確認していく第7章から第9章という配列で9編の論文が収録されている。アメリカ文学における資本主義から環境主義への移行を系統立てて論じる理論書というわけではないが、アメリカ文学と資本主義・環境主義との関わりやその背後に潜む思想などをコンパクトに知ることが出来る著書である。また、著者自身が解説するように、わざわざ「アメリカ文学を中心として」と断るのは、本書には第2章のイギリスのジョン・ミルトンや第9章のニュージーランドのイアン・ウェッドなどアメリカ以外の作家を含むからであるが、ほぼアメリカ作家の作品論と言ってよいだろう。以下、便宜上、第1章から第3章、第4章から第6章、第7章から第9章の3つのセクションに分けて、本書の内容を辿ってみたい。

アメリカにおける環境保護運動の先駆けであるエマソンとソーローから説き起こし、ジョン・ミューアとアルド・レオポルドを経て現代のレイチェル・カーソン、エドワード・アビーそしてテリー・テンペスト・ウィリアムズへとアメリカの環境主義と環境文学を概説的にたどる第1章「アメリカの環境文学と環境主義・環境保護運動」の次に、ピューリタン革命と資本主義の補完的關係をジョン・ミルトンの『失樂園』の表現に確認していく第2章「資本主義・キリスト教・エ

コロジャー—ミルトンと楽園回復ナラティヴー」が続く。キリスト教、特にプロテスタンティズムの労働観の発想転換が資本主義の勃興を引き起こしたことを実証する R. H. トーニーの『宗教と資本主義の勃興』とマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に依拠し、プロテスタンティズムの美德である「節制・忍耐」が理性存在である人間の「自由」を保証し、この「節制・忍耐・自由」の実践者である人間が自らの労働を介して自然の活用を促していくという社会構造の変化や人々の意識の変化を『失楽園』の表現に予定調和的に検証していく。ただ本章の最後で、この自然活用(破壊)をキャロライン・マーチャントの「主流的楽園回復ナラティヴ」に繋げていく箇所は、紙数の都合からか少し唐突の感は否めない。また、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の原文はドイツ語であるが、引用文献にはタルコット・パーソンズの英語訳しか挙げられていない。もし英語訳からの翻訳ならば、その旨明記すべきであろうし、明記したとしてもドイツ語からの英語訳を日本語に翻訳するという重訳であることには変わらないので、せめてドイツ語原文からの翻訳である大塚久雄あるいは中山元の日本語訳の参照は必要ではないだろうか。第3章「多民族国家アメリカのグローバリゼーションと環境—クレヴカール、エマ・ラザルス、ホイットマン—」では、多民族国家アメリカの形成、領土拡張を正当化するマニフェスト・デスティニー、資本主義・産業主義による土地開発と同時期に芽生える自然との共生といった問題群を手際よく作品に探っていく。

次のセクションは、本書で一番重要でありかつ著者が最も得意とする19世紀アメリカ作家、ホイットマン、レベッカ・ハーディング・デイヴィス、メルヴィルを扱う。第4章「ホイットマンと都市のエコロジャー—マナハッタというユートピア—」は、都市詩人ホイットマンが、貧困、犯罪、売春、不衛生といったディストピアと言ってよい現実のニューヨークを詩の中ではユートピアに昇華していく過程を辿っていく。フェリーの乗客の中には、喫煙したり唾を吐く者がいる。このような不道徳不衛生な有様に乗客の大半が「いらだち、むかつき、うんざり」しているのであり、「いかなる人も船上では喫煙を許されてはならない」と現実のニューヨークに対する批判をホイットマンは『イーグル』紙で展開する。だが、そのホイットマンが、「何百人また何百人」もの人が一日の仕事を終えフェリーに乗って「家路につく」とき、「西の雲」の「あと半時間で沈もうとしている太陽」とその夕日に映る大都市の光景、この自然と調和する都市の美しさに乗客が共有する刹那を詩に描きこみ、現実のニューヨークをユートピア的ニューヨークに昇華していると著者は分析していく。

第5章「レベッカ・ハーディング・デイヴィスの「製鉄工場の生活」における移民工場労働者の環境」は、読者層、19世紀アメリカにおける女性労働、劣悪な労働環境と社会改革運動など19世紀アメリカの歴史状況を参照しながらデイヴィスの「製鉄工場の生活」を概説する。この物語が発表された『アトランティック・マンズリー』はエマソン、ロングフェロー、ホームズなどボストン中流階級出身のエリート中心の雑誌であり、その読者もまた知的エリート層であること、1840年代から建設された製鉄工場の環境汚染や工場労働者にアイルランド系移民が多いことなどこの物語の歴史的背景を説明していく。特に、58000人の綿工場労働者うち約70%が女性であったことや1861年の製鉄工場労働者の平均賃金が週12ドルであったことなどは、当時の労働者の生活を推測するのに大いに裨益する情報であろう。続けて、「製鉄工場の巨大な煙突からゆっくりと折り重なるようにむつつりと出てくる」煙が、町中の至る所、水溜まり、波止場、川、家の玄

関、ポプラの木や通行人の顔にまで「油でねとねとの煤となってべったりとくっついている」という工場が排出する煙の汚染の場面から、自然と人間の魂の共鳴を謳う超絶主義や伝統的なパストラリズムは既に「効用を失った「夢」」でしかなく、その危機感から知的エリート読者の目を女性工場労働の過酷な現実に向けさせる社会改革的意図がデイヴィスにはあったと著者は解説する。そして感傷的なキリスト教が読みとれる物語の最後の場面についての様々な解釈を紹介しながら、デイヴィスの社会改革思想には「女性的原理、感傷的な神学、精神的高潔さ、そして農業的家族共同体」といった要素が含まれているというジェイン・ローズの解釈で終わる。はじめてこの物語を読もうとする者にとって、歴史的背景や批評の傾向を簡便に知ることができるという意味で本章は有益であるに違いない。

第6章「メルヴィルの「乙女たちの地獄」における女性工場労働者の環境」は、19世紀の女性工場労働者の労働環境を書き込んだ「乙女の地獄」を環境正義の書と位置づけ、しかし語り手が男性であることから女性工場労働者の苦境への共感には限界があると論じる。マサチューセッツ州ウォルサムに建設されたアメリカ初の紡織一貫工場で働いていた女性たちは月刊誌『ローウェル・オフアリング』（1840年～1845年）を編集していた（ほぼすべての文章がマサチューセッツ大学ローウェル校のHPで閲読することができる）。著者は、ノートン版『ローウェル・オフアリング』を利用し、ローウェル工場では働く者の約75%が女性であることや女性工場労働者の週給が1.85～3.00ドルであり、この賃金は男性の約半分ではないこと、だが教員職よりも6～7倍年収としてはよかったこと、さらに労働時間を10時間に制限する組合運動が盛んであったこと、衛生環境は決してよくなかったことや1860年には労働者の61.8%が移民（その半分がアイルランド系）であることなど、豊富に歴史知識を提供してくれる。また、メルヴィルの「乙女の地獄」の労働環境についても、1860年の製紙工場での女性賃金は週給3.27～3.92ドルで、週給5.50～10.00ドルの男性の半分以下でしかなかったこと、製紙工場で働く女性の41%が21歳以下で、また64%の女性は未婚であったことなど、作品の背景を知る上で重要な情報を提供している（ただし、週給1.85～3.00ドルのローウェル工場と週給3.27～3.92ドルの製紙工場では、給与に約2倍近い差があり、同じ女性労働と言っても一括りに貧困と決めつけるのは危険ではないだろうか）。このような歴史背景の解説の後、著者は「乙女の地獄」の中の「ノッチ」や「血の川」、「白」、「ピストン」といった表現や場面を象徴的に解釈して女性の苦境を読み込む。そして、作品中に象徴的に盛り込まれた女性の苦境を何故語り手は理解できなかったのかという問いを設定し、ワイチー・ディモックの「文学市場を女性作家に奪われた男性作家の恨み」という解釈を引用しながら、語り手は「女性工場労働者の劣悪な労働環境を告発してはいるものの、十分には理解しているとは言えない」と結ぶ。前半の歴史解説と後半の象徴的作品解釈との有機的な関連性が示されていれば、読者の分かりやすさも高まっただろう。

第7章から第9章は、環境主義文学を扱う。第7章「メルヴィルの「ピアザ」に見るアメリカの風景—グレイロック山と女性—」は、パストラリズムやロマン主義の風景がイギリス帝国主義的かつ男性中心であるのに対し、アメリカの風景には女性の存在がアメリカ共和国の闇として書き込まれると言う。第8章「ケープコッド文学に見るソローのフィンチへの影響—『ケープコッド』と『大切な場所』を中心として—」は、『大切な場所』と『ケープコッド』との照応関係を追っていき、両者とも海を「巨大な死体置き場」と捉える点で一致するが、自然に向き合う人間のあ

り方である人間中心主義をいかに脱却するかにおいては微妙に立ち位置が異なると論じる。本書の中で本格的に環境主義文学を扱う第9章「ロマンティックな海からグローバルな共有地としての海へーロングフェロー、メルヴィル、イアン・ウェッドー」では、海と市場をそれぞれ「ロマンティズム・永遠」と「現実の過酷さ・人間の無情」とに腑分けする。人間の欲望が利益を求めて自然を破壊し、しかしその欲望は「海」という自然の中で黙示的結末を迎えることになるが、先住民の知恵に介助されて人間は永遠に続く自然の営みに目覚めるのであり、そこに人間主義からの脱却の可能性があるとして読み込んでいく。今日的関心である環境正義の考え方がコンパクトにまとめられ、この批評分野への導入としての役目も果たしている。

最初にも書いたが本書は、アメリカ文学における資本主義と環境主義を系統立てて論じる理論書ではないが、この分野についての知見をコンパクトに提供してくれる。ただ、「共有地の悲劇」といった重要な用語が詳しい解説抜きで使われる箇所があり、この概念が訴える警告についても少し解説があれば、本書の意義は更に大きくなったと想像され、その点が悔やまれる。

広瀬佳司・佐川和茂・伊達雅彦 編著

『ホロコーストとユーモア精神』

(彩流社、2016年9月、286頁、本体2,800円＋税)

三重野 佳 子

「ホロコースト」と「ユーモア精神」という、一見対極にあるように見える二つのものを本書のタイトルは結びつけている。そもそもユーモアをもってホロコーストを描く、というのは想像するのが困難なことである。まえがきで編者の広瀬佳司氏は、サラ・ブラッハー・コーエンの『シンシア・オジックのコミック芸術』の中でホロコーストの扱いについて守るべきこととして、「例のない大惨事である特殊性を深刻に受け止め、芸術的な効果を狙おうとして事実を曲げてはいけないこと」と「このホロコーストの深刻な性質を気まぐれに傷つけてはいけないこと」の二つが挙げられているという。そして、ホロコーストはこのような特殊性を持っている故に、作家たちも直接経験していないホロコーストを描くことには慎重にならざるを得ない事情を述べている。

参考までに、本書で主に扱われている作家・作品は以下の通りである。

- 第 1 章 バシェヴィス・シンガー『ショーシャ』『敵、ある愛の物語』とシンシア・オジック『ショールの女』
- 第 2 章 アイザック・バシェヴィス・シンガー『敵、ある愛の物語』
- 第 3 章 バーナード・マラマッド『神の恩寵』
- 第 4 章 シンシア・オジック「雇われ人」
- 第 5 章 シンシア・オジック「空中浮揚」

- 第 6 章 フィリップ・ロス『解き放たれたズッカマン』
- 第 7 章 フィリップ・ロス『オペレーション・シャイロック』
- 第 8 章 レスリー・エプスタイン『ユダヤ人の王』
- 第 9 章 アート・スピーゲルマン『マウス』
- 第 10 章 チャールズ・レズニコフ、アイリーナ・クレフィシ、ハーヴィ・シャピロ、ジェ  
ローム・ローゼンバーグ他 ホロコーストを扱った詩と絵画
- 第 11 章 映画『ミケランジェロの暗号』
- 第 12 章 ジョナサン・サフラン・フォア（小説・映画）『エブリシング・イズ・イルミネ  
イテッド』

アイザック・バシエヴィス・シンガー、アイリーナ・クレフィシ、ポール・ヘンゲを除けば、これらの作家たちは皆アメリカ生まれの、移民二世または三世のユダヤ人である。彼らとホロコーストの関係は、身内である両親、祖父母、親戚がホロコーストを体験した場合と、同時代にホロコーストという大事件が起こるといふ体験をした場合とに分けられる。いずれにせよ、ホロコーストは、彼らのユダヤ性を強烈に意識させる出来事であった。本書で主に取り上げられているのは、ホロコーストを直接体験してはいないが、間接的な体験としてのホロコーストを一つのテーマとして描く内的必要性に迫られた作家たちによる物語群と呼んで良いであろう。

ユダヤ系、お笑いと言え、ウッディ・アレンやマルクス兄弟の名前が頭に浮かぶが、私自身には、これがユダヤのユーモアであると指摘できるほどの知識も経験もない。「ユーモア」といっても、作品中の何をしてユーモアと呼ぶのか、なかなか定義は難しいが、第 11 章の「ユダヤ的ユーモアと転倒するアイデンティティ」で、中村善雄が、ホロコーストとユーモア、ユダヤのユーモアの性質についてわかりやすくまとめてくれているので、これを中心に紹介しつつ、ユダヤのユーモアについて考えてみたい。

中村は、ホロコーストにおける笑いを「この未曾有の大虐殺自体を揶揄あるいは軽視するのが目的というのではなく、死と隣り合わせの時代を生き抜くために必要不可欠な手段」と捉える。中村を含め、本書のいくつかの章でも、ヴィクトール・E・フランクルの『夜と霧』についての言及（第 2 章、第 8 章、第 11 章）があり、収容所の異常な体験の中で、ユーモアが精神のバランスを保つためにいかに欠かせないものであったかに触れている。『ミケランジェロの暗号』の脚本を担当したポール・ヘンゲの「ユダヤ人には、ただ同情されるだけではなく、自分たちの力で困難を解決していく力があります。また、人間はどんなに最悪な状況に陥っても、心にユーモアを持つことで生きていくことができる。つまり、ユーモアのなかには生き抜くための力が秘められているのです。」という言葉の中村は引いているが、ホロコーストに関わるユダヤ人のユーモアとは、一つにはホロコーストを生きのびるための精神的な支えとなるユーモアである。

さらに、そのユーモアの一つの特徴として、中村は先述のコーエンやジークムント・フロイトを引用する。コーエンはユダヤのユーモアが「選民思想による輝かしき運命と現実を覆う多くの苦境との間の格差から生じた」ものであり、「その理想と現実の大きな乖離に対する失望とその苦難から自己を解放する一つの方法が、ユダヤ的ユーモアの特徴である自虐的な笑い」であるという。この自虐的ユーモアには、フィリップ・ロス、シンシア・オジックをはじめ、本書の多くの章で語られる作品のユーモアが含まれるであろう。

また、中村によれば、「権威者を嘲り笑う種類のユーモア」もユダヤ的笑いであり、「ユダヤのユーモアは言葉遊びや皮肉や風刺を好み、あらゆる点で反権威主義的であり、宗教的権威者でさえ嘲笑の対象となる」（『ユーモア研究辞典』）。さらに宗教的権威者だけではなく、まえがきで広瀬が引用するオジックの言葉では、「イディッシュ語では、『神』さえも、大聖堂的な威光が無い代わりに、人間が共感できるような親しみやすさや気軽さを持つ小さな創造主という雰囲気を持つ」という。第2章で今井真樹子は、「シンガーの主人公たちは、神に笑われている自分たちを笑っている」のではないかと述べ、ホロコーストの時代を生きたシンガーが、その不条理さに生涯疑問を抱きつづけ「神に個人的な戦いを挑んだ」というシンガーの言葉を引く。第3章では、鈴木久博が、マラマッドの『神の恩寵』に関して一節を「神に対するユーモア」に割いている。結局は敵うことはない神に論争を挑んでみるちっぽけな人間のおかしみが、笑いを誘うユーモアとなっているのであり、権威者を嘲り笑うユーモアもまた、神と権威者とユダヤ人という三者の構図の中では、権威者もまた神の与える試練の中に組み込まれた一つの要素であり、どんなに上を向いて嘲っても、勝つ見込みのないユダヤ人という構図があるからこそ苦い笑いを生み出していると言えないだろうか。

他にも、第4章で秋田万里子が論じる「ホロコーストに無知なアメリカとの格差が生む笑い」が登場する。オジックの小説「雇われ人」の登場人物ラシンスキーがテレビで語るホロコーストの経験談は、無知なアメリカ人には実話だと信じてもらえず笑いを呼ぶ。「ホロコーストという歴史上類を見ない大虐殺がコメディになり、ホロコースト生存者を愉快なストーリーテラーに変えてしまうアメリカ。このような奇妙な〈笑い〉が成立してしまう国としてアメリカをシニカルに描くことで、オジックはホロコーストに対して〈無知〉であったアメリカを批判すると同時に、同じユダヤ人であるにもかかわらず、当時ヨーロッパで起きていたことに自分が無関心だったことへの自責の念を表している。」と秋田は言う。同時に、経験者ではない者がホロコーストを想像力でもって描くこと自体についてのオジックの葛藤についても触れられている。「ホロコーストのあと、またそれを知ること、すべての人は目撃者なのだ」というオジックの言葉を引き、「歴史の共有こそがユダヤ人のアイデンティティである」と考えるオジックは、歴史を伝えていく使命を強く感じ、物語を創造する」という秋田の言葉は、おそらくホロコーストをテーマに物語を創ろうとするすべての作家に多かれ少なかれあてはまるのではないだろうか。

本稿を書いている途中で、たまたま“Are We Allowed to Joke About the Holocaust?” (Marjorie Ingall, *Tablet* March 2, 2017) という、映画 *The Last Laugh* に関する記事をウェブ上で目にした。この映画自体が、ホロコーストを笑いの種にできるのかを問うものらしい。こうした映画が作られることそのものが、ホロコーストをユーモアをもって描くことの難しさを表している。本書の12章の論考は、それぞれに読んで面白いものだが、直接ホロコーストを描く作品というのは少なく、ホロコーストを物語化することの難しさを感じた次第である。



## 編 集 後 記

『中・四国アメリカ文学研究』（第53号）をお届けします。今回は5名の論文投稿希望者があり、編集委員会として最終的に受理した論文は3篇でした。厳正な審査の結果、1篇の採用となりました。今号の執筆者の氏名と所属機関は以下のとおりです。

大 野 瀬津子（九州工業大学）  
松 島 欣 哉（香川大学）  
本 岡 亜沙子（広島経済大学）  
山 内 玲（東北大学）  
山 口 善 成（高知県立大学）  
森 瑞 樹（広島経済大学）  
藤 本 幸 伸（山口大学）  
高 橋 愛（徳山工業高等専門学校）  
市 川 博 彬（島根大学名誉教授）  
栗 原 武 士（県立広島大学）  
三重野 佳 子（別府大学）

今年度の編集委員は次のとおりです。

栗 原 武 士（県立広島大学）  
三重野 佳 子（別府大学）  
辻 祥 子（松山大学）  
堤 千佳子（山口東京理科大学）

次号は2018年6月に発行の予定です。会員の皆様からの多数のご投稿をお願いします。投稿希望のご連絡は、e-mailでも受け付けます。編集責任者（[tsutsumi@rs.tusy.ac.jp](mailto:tsutsumi@rs.tusy.ac.jp)）または事務局までご連絡下さい。また、過去一年間に会員が関わって出版された研究書等のなかで、優れたものの「書評」を掲載しますので、事務局と編集責任者までご献本をお願いします。

44号以降の会誌の内容はすべてPDF化し、ホーム・ページで公開しています。43号までの会誌については、目次のみ公開しています。ご活用下さい。

会員が所属される機関等で、会誌に掲載された論文等を公開される場合（個人のホーム・ページを含む）は、必ず、PDF化した会誌あるいは抜き刷りの紙面を用い、当該論文等が掲載された会誌の号数を明示して下さい。公開に際して、事務局へのご連絡は不要です。なお、著作権は、執筆者本人と中・四国アメリカ文学会に帰属するものとします。

#### 投稿規定

1. 資格：過去1年以上、本学会会員であること。
2. 内容：アメリカ文学全般に関する、未公刊の研究論文。
3. 制限：投稿原稿は、完成原稿とし、一人につき1篇とする。
4. 体裁：
  - 1) 執筆に際してはワープロ・ソフトを使用し、和文・英文とも、仕上がりページの書式（A4判で、1ページ43字×38行、文字のポイントは11）に設定すること。
  - 2) 和文の場合は、注および引用文献を含む9枚以内の本体（ただし、9枚目は5行分の余白を残すこと）に、英文のシノプシス1枚を付すこと。
  - 3) 英文の場合は、注および引用文献を含み11枚以内。英文のシノプシスは不要。
  - 4) 和文の場合は、外国語の固有名詞（人名・地名）および作品名は日本語で示し、初出の箇所での原綴りを丸括弧内に表記すること。ただし、よく知られている場合は省略してよい。
  - 5) 本文中の引用の仕方、注及び引用文献の表記の仕方、英文原稿（英文シノプシスを含む）のスタイル等に関しては、*MLA Handbook for Writers of Research Papers* または『MLA 英語論文の手引き』（北星堂）の最新版に従うこと（Works Cited方式とする）。
  - 6) 投稿論文には、氏名、謝辞、口頭発表の仔細などは記載せず、表題のみを記すこと。
  - 7) 投稿論文には、通し番号を付すこと。
5. 提出：
  - 1) 打ち出し原稿2部を編集責任者の許へ送付すると共に、MSワードで作成した添付ファイルをメールで送ること。
  - 2) 中・四国アメリカ文学会のホームページにある「投稿チェックシート」をダウンロードし、必要事項を書き込み、打ち出し原稿と共に編集責任者の許へ送付すること。
6. 締切：
  - 1) 投稿希望の場合は、毎年10月末日までに、(1)論文の表題、(2)和文・英文の別、(3)予定枚数、(4)氏名、(5)所属、(6)住所・電話番号・メールアドレスを、葉書あるいはメールで編集責任者または事務局へ連絡すること。
  - 2) 投稿の締切は、毎年1月10日とする。期限厳守。
7. 宛先：〒756-0884 山陽小野田市大学通1-1-1 山口東京理科大学 堤研究室
8. その他：投稿原稿は返却しない。

「シンポジウム報告」および「書評」の執筆要領は、ホーム・ページをご覧ください。

ISSN 0388-0176

中・四国アメリカ文学研究 第53号

---

2017年6月1日 発行

編集兼発行者	中・四国アメリカ文学会
発行責任者	新田 玲子
編集責任者	『中・四国アメリカ文学研究』編集委員会
事務局	広島大学文学部 大地研究室 〒739-8522 東広島市鏡山 1-2-3 Tel : 082-424-6685 e-mail : shohchi@msn.com URL : <a href="http://www.chushi-als.org">http://www.chushi-als.org</a>
印刷	株式会社 三和印刷社 〒752-0927 山口県下関市長府扇町 9-1 Tel : 083-249-1130 Fax : 083-249-1030

---

*Chu-Shikoku Studies in American Literature, No. 53*

Edited, published, and distributed by  
The Chu-Shikoku American Literature Society

**Executive Office** : Faculty of Literature (c/o Assoc. Prof. Ohchi)

Hiroshima University, 1-2-3, Kagamiyama,  
Higashi-Hiroshima, Hiroshima 739-8522 Japan

Tel : 082-424-6685  
e-mail : shohchi@msn.com  
URL : <http://www.chushi-als.org>

**2017**

**The Chu-Shikoku  
American  
Literature Society**